一名をうる爲に學問すまじき事
一利を貪る爲に學問すまじき事

小河立所

(22)學規三條

一、己れに反求して人に責むる勿れ、
一、忠以て己れを盡くし、恕以て人を待つ、
三、人の詐を逆へず、己れが不信を思へ、

室鳩巣

(先哲叢談後編卷之二)

(23)自警條目

一毎朝卯前後可起、
一毎夜子前後可臥、
一除賓客或疾病及難避事、不可一日懈怠、
一毎朝對案、先整衣帶、乃一坐了、非有事故、不可妄動、
一對案之間、惰念將生、呼起正念、可痛懲之、暫時不可忽、
一不可妄語、雖下人、不可接無益之言、
一飲食須充飢渴、不可過節、及不可不時食飲、
一色欲之念一萌、便可遏絶之、不可有時放之、
一雜念不問善惡、最害於讀書之間、戰戰兢兢、可預防之、
一讀書之時、凝定志意、不可急速、又明張心目、不可蹉過、
一畢竟不過盡己職分、以終一生、則修行之間、不可有功利之念、
右十一條、欲銘心肝而操守之、一一在天之照覽、敢昭告于百神之靈、

(補遺鳩巣文集卷十)

(24)日用心法品目

三輪執齋

一　立志をはじめとす、
二　辱をしるを助けとす、
三　孝悌を本とす、
四　氣を養ふ、
五　量を廣ふす、
六　氣象を考ふ、
七　內省、
八　致良知、
九　言行念慮、妄にすべからず、
十　執中、

（日本倫理彙編卷之二）

(25)樂亭壁書　松平樂翁

一夜ふけてことゝふとも、はつほとゝぎす、雁かねは、かならずうとくすべからず、

一枕にかよふとも、咎なきものは、花の香、遠寺の鐘、霜夜の蟲の音は、殊にあはれむべし、

一にくゝともゆるすべきは、花の風、月の雲、打つけに爭ふ人はゆるすのみかは、

一野分のあしたの庭のおもならでは、亂るゝをゆるすはあらざるべし、

落花落葉の狼藉は、ゆるすのみかは、酒のみだれは、其たぐひならず、

一月はいつとても親しむべし、されど過ぎし世をしたふもくるし、行末をおもふもうるさし、たゞむかひてこそあらまほしけれ、腰のあたり

にいかづちなり出すは、影かたしきて寢てもありなん、花の下臥も同じ、

一あるもなきにおとるは、誠なき人の才、女の才、いなづまのかげ、あふと見し夢、

一うたてきものは、みな月の鶯、落葉の風にさわぎたる、

一おほきをいむものは、酒の肴、茶器、遲櫻、りうたんの花、ほとゝぎす、鈴蟲、

一よきはよくあしきはあしきは、うたがひもの、やめる女、風、流も其うちなるべし、

一我ほどを知り、なすべき事をなして、こそいはめ、しひて古をしたひ、月花をめづるとて、いかでいはん、夜すがら月を見んよりは、日を惜むにしかじ、

一うづもれておかしきものはあらじ、子の日の小松、夏艸にかくれたるはおかし、

一おもふにたがふてうれしきは、八月十五夜の晴れたる雲間の月、幼きとおもふが文つくり歌よみたる、

一うとむべきものは、歎きといふもの、よそ見ぬりくつ、午祭のつゞみのおと、蛛のゐ、あしだのあと、すゞめ、猫、鼠、猶ほにくむべし、打もころしつべきは、蠅、蚊、ひる出るは、ことにこそ、

一たふとむべきは、人にこそこえたる人、たふとむまじきは、人にこえざるさまの人、

一きゆるときをゆるして、雪を見、雫の月をおもひて、夕立にあふべし、

一梅が香を、櫻の花、柳の枝になどゝは、おもふまじき事なり、花のくれなゐ、柳の綠、心をわけて樂しむべし、

一足れりとおもふべきは、我身、足らずとしてよきものは、我つとむるみち、

一たのしきとおもふは、たのしきもとなり、いかで外に求むべきと樂しむ翁いふとぞ、

（警箴叢彙卷三）　柴野栗山

(26) 示三上仲敬

力人之養力也。飯之生熟失度不食。魚之多骨不食。娼妓之養美也。日喰豆腐滓。以悅澤其肌膚。又減食忍飢。以纖其細腰肢。夫力之爲用。止爲一搏之勝。而已矣。美之爲用。止爲一夫之悅。而已矣。而以力人娼妓之智。猶能自惜自愛乃爾。大丈夫將繼往開來。出則躋此民於仁壽處。則傳斯文於將來。今乃艶乎一醉一飽之快。以危性命者。何哉。孟子曰。飲食之人。則人賤之矣。蓋以娼妓力人是不如也。

（栗山文集卷之一）　岡田寒泉

(27) 凡て學は己れがいまだ知らざることを知り、疑はしきは審に問ひ、己れがいまだ行ひ得ざる所を勤めて、聖賢の域に入んことを欲すべし、然らざれば、數萬卷の書を讀み、千萬世の古に通ずるとも、今日の益なかるべし、必竟學は人たるの道を實に知り實に行ふことなり、博聞强識、或は詩文に巧にして、且つ書を口に說て審なりとも、踐み行ふ事能はざれば、虛文虛說となりて、罪を聖賢に得るに至るべし、深くいましめて自ら省み、實に知りて實に行ふべし、

(28) 座右銘應鈴木某需　塚田大峰

射乎射乎以喩君子不責諸他反求諸己中與不中何在弓矢內志不回外體不倚未向正鵠修鍊在此勿稱人非勿揚己是勿文己過勿蔽人美群居勿爭獨處勿恥禍至不懼福至不喜行勿務多行多屢否言勿務多言多愈毀行有所顧言有所履惟口是愼忠信惟止

(大峯文集卷六)

(29) 自警偈　賣茶翁

夢幻生涯夢幻居了知幻化絕親疎貪榮萬乘猶無足退步一瓢還有餘無事心頭情自寂無心事上境都如吾儕苟得體斯意廓落胸襟同太虛

(近世畸人傳卷之二)

(30) 學に志し藝に志す者の訓　三浦梅園

今の人或は學に志し、或は藝に志ざすもの、一旦憤を起し、晝夜をわかたずつとめはげむといへども、已に一月を經、半月を過ぎ、怠る心早く生じ、吾がつとめの至らざるとはいはで、生質の過に諉す、馬はやしとて朝暫くはしりてやまんにいかでか牛の終日ありかんに及べき、谷間の石の磨け井幹のまるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや、今日やまず明日やまず今年やまず明年やまず、然して後そのしるしあり、人一生の力をその道に用ふるさへ、尙その奧儀にいたるはやすからず、況や我一月半月乃至一年半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす、思はざるの甚きなり、むかし李白書を匡山によむ、漸く倦みて他行せし時、道にして老人の石にあてゝ斧をするにあふ、是をとへば針となすべきとてすりしと云ひけるに感じて、勤めて書をよみ、終にその名をなせり、小野、

道風は、本朝名譽の能書なり、わかゝりしとき、手をまなべども、進まざることをいとひ、後園に躊躇(たちやすら)ひけるに、墓の泉水のほとりの枝垂れたる柳にとびあがらんとしけれども、とゞかざりけるが、次第〳〵に高く飛んで後には終に柳の枝にうつりけり、道風是より藝のつとむるにある事をしり、學んでやまず、其の名今に高くなりぬ、

（梅園叢書卷之上）

同

一、學問は飯と心得べし、腹にあくが爲めなり、かけ物などの樣に人に見せんずる爲めにはあらず、

一、書物は金かしの帳のやうなるものなり、金なき人のもたらむは澁紙ふむほどの用にこそ、

(31) 戲示學徒

一、學文はくさきなの樣なり、とくとくさみをさらざれば用ひがたし、少し書を讀めば少し學者臭し、餘計書をよめば餘計學者くさし、こまりものなり、

一、學文を芥の樣におもふべからず、上に浮きたがる程に下地の水も今はのまれず、

一、學文は置所によりて善惡わかる、臍の下よし、鼻の先惡し、

一、學文は輕業の樣にするがあし、輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり、

一、衣裳うつくしくかざり、人にすかれんとするは賣女なり、人の見る時所躰をなし、人に譽られんとするは歌舞戲のものなり、今の學者はどうやら此眞似する樣なり、

一、碁のうち樣は、いつにても先をとればまけぬものと我れもしれり。と

かく道理はのみこみよし、態のきかぬか笑止なり、

一、足の皮はあつきがよし、つらの皮はうすきがよし、人諸共に小賢しく口はきけど行ひは女童に見限らる、さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し、よく心得てつゝしむべし、

（梅園拾葉卷之下）

(32) 洗心洞盟約書

大鹽中齋

聖賢の道を學んで以て人たらんと欲せば、則ち師弟の名正さゞるべからざるなり、師弟の名正しからざれば、則ち不善醜行ありと雖も、誰れか敢て之れを禁ぜん、故に師弟の名誠に正しければ、則ち道其間に行はる、道行はれて善人君子出づ、然らば則ち名は問學の基なり、正さゞるべけんや、某固陋寡聞と雖も、一日の長を以て其責に任ずれば、則ち師の名を辭するを得ず、而して其名の壞るゝと壞れざるとは、大率下文條件の立つと立たざるとにあり、故に盟を入學の時に結び、以て豫め其不善に流るゝの弊を防ぐ、

忠信を主として聖學の意を失ふべからず、若し俗習の爲めに牽制せられて廢學荒業、以て奸細淫邪に陷らば、則ち其家の貧富に應じ、某告ぐる所の經史を購ひ、以て出だすし、其出だす所の經史、盡く之れを塾生に附す、若し其本人にして出藍の後、各〻其心の欲する所に從はゞ可なり、

學の要は孝弟仁義を躬行するにあるのみ、故に小說及び異端人を眩するの雜書を讀ひべからず、若し之れを犯さば、則ち少長となく鞭扑若干、是れ即ち帝舜扑を敎刑となすの遺意にして某の創する所にあらざる

なり、

毎日の業、經業を先んじて詩章を後にす、若し之れを逆施せば鞭扑若干、

陰に交を俗輩惡人に締び、以て登樓縱酒等の放逸を許さず、若し一たび之れを犯せば、則ち廢學荒業の譴と同じ、

一宿中私に塾を出入するを許さず、若し某に請はずして以て擅に出つれば、則ち之れを辭するに歸省を以てすと雖も、敢て其譴を赦さず、鞭扑若干、

家事變故あらば、則ち必ず諮詢す、之れに處するに道義あるを以ての故なり、某人の陰私を聞かんと欲するにあらざるなり、

喪祭嫁娶及び諸の吉凶、必ず某に告げ、與に其憂喜を同うす、

公罪を犯せば、即ち族親と雖も、掩護すること能はず、之れを官に告げて以て其處置に任ず、願くば儞們小心翼々、父母の憂を貽すること莫れ、

右數件忘るゝ勿れ、失ふ勿れ、此れ、是盟を恤へよ、

（洗心洞詩文卷下）

(33) 遺誡子孫書

中村栗園

吾れに一種護身の靈符あり、少より老に至るまで、眷々服膺して、未だ嘗て一日も之れを放ちしことあらず、今舉げて以て之れを汝が曹に傳ふ、汝が曹宜しく敬んで之れを受けて失墜することなかるべし、但し其物たる、彼の神社佛刹より出だす所の符とは判然として夐に別なり、故に目も睹ること能はず、手も取ること能はず、形と影とを併せて亦有ること無し、何をか靈符といふ、辛苦艱難、是れなり、人備に此四者を嘗めて、而して能く其味を知るときは、則ち以て身を立つべく、以て名を揚くべく、以

て富貴を致すべく、以て壽考を得べし、然れども其之れを嘗むるは、專ら少小の體氣方に旺なるの秋にありて、老大の神志既に衰へたるの日にあらざるなり、

（栗園文稿）　林子平

一、孝悌忠信勇義廉耻の八字能く心に記すべし、

(34) 學則

一、孝は親に仕る道なり、親に對して不敬不作法の言葉なく、不敬不作法の所業なく、其身の行作正直にして、親の心を安堵せしむる事なり、

一、悌は兄を敬ひ、弟を愛する道にして、且つ長者に順ふ道なり、兄は云に及ばず、己れより年の增さりたる人をば兄同樣に敬ひて能く順ふを云ふ、順とは行住坐臥飲食等に至迄、禮讓を忘れずして順道を守る事なり、又年減する人を弟同樣に見る事なり、

一、忠は君に仕る道にして、且つ朋友に交るに僞なく信義を以てする事なり、

己れを盡すを忠といふ、君に事へて死するも、己れを盡すなり、朋友に信あるも己れを盡すなり、故に士は己れを知るものゝ爲めに死すと云へり、都て忠なり、

一、信は每事に虛事虛言なく實事を以て旨とする事なり、上天子より下庶人まで信あれば人服し、信なければ人背く、貴賤とな く信を失ふ事なかれ、

一、勇は義の相手にて勝氣の事なり、

文武の諸藝も心術心法も勝氣にあらざれば上達成就遲きなり勝氣は万能の上達すると知るべし、

一、義は勇の相手にて裁斷の心なり、

道理に任せて決斷して猶豫せざる心を云ふなり死すべき場にて死し討つべき場にて討つ事なり、

一、廉はかど有りて、ひしげず、立派なる事なり、

毎物いさぎよく奇麗に正しく、むさくなき心なり捨つべきを見てすて取るまじきを取らざるなり恥の相手なり、

一、恥は辱を知て手前勝手を致さゞる事なり、

毎事に卑怯未練なる所業を致して人に笑はれまじ穢はしく臆病なる所業ありて他日さげすまれ間敷と心を清く正しく持つ事なり廉の相手なり、

右八德は人の土産なり

一、讀書怠る事なかれ、

讀書は萬能の基なり、

卯の時起て高聲に讀書すべし、

辰の時より己の時まで字を習ふべし、

晝の間は下に記すごとく武藝を習ふべし、又農工商は卯の時より其持前の業を致すべし、他の遊藝等を習ふ事を禁ず、夜は諸軍談及び諸記錄等年齡に隨ひ、或は三五枚、或は十枚、貳十枚乃至百枚も讀むべきなり、

一、武藝に精出すべし、

巳の時より酉の時迄、藝道を習ふべし、就中刀槍弓馬を先とす、併學問七歳武藝十六歳の心懸なるべし、

一、良智を能く認記して心學を磨くべし、人々善惡邪正に附いて可否如何と顧みれば、善は善、惡は惡と、明に之を辨へ、知る心あるなり、是れ良智なり、此良智は學ばずして、天然に百人の胸中に存在する者にして、所謂神明なり、萬事此良智に問ひて取計ふべし、此良智のまゝにするには、克己復禮の修行を強ひて勤むべし、克己は即ち勇なり、顏子は是れを仕終せたり、其次は是れを勤むべし、

一、克己復禮の二言、能く辨へ勤むべし、

克己は己に勝つと云事なり、己れとは人慾の私にて、手前勝手なると皆己れなり、此己れを押除るは克己なり、

復禮は慾に勝ちて道と義に叶ふ樣にする事なり、事物皆禮不禮有り、顧るべし、或は妄に怒氣發る時など何故如斯怒氣至るやと顧ば、元より私の我儘より起る疾なれば、一度顧て忽ち消散するなり、最も是等の處大に勇を用る所なり、

一、茶の湯猿樂の二つは、當朝の大禮なり、然るに隱者の翫び事、殺伐の音などゝ稱して、一圓に不心得は大不覺悟といふべきか、

附、閑暇の時、詩文、或は琴棋書法等の諸藝も習ふべし、空しく日を送るとなかれ、

右八德讀書武藝良智克己復禮茶の湯猿樂の八條は皆身に近き事にして、今日の業に係る處なり、遠大の事にあらず、童子是れを勤むるに、禹は寸陰を惜むと云へり、寸陰とは一寸の隙と

云事なり、又古人業を勤むる者、子に臥し寅に起ると云ふは、一ケ月の日數三十日にては學び足らざる故、一月を四十五日にする割合なり、是れ勇の持前なり、聖人の心法も佛氏も神家も武藝者の氣位も勇にあらざれば行ひ遂げられぬなり、都て心法は勇を本とし、進む事を專に勤むべし、文武の二藝も皆此心法を宗とするなり、是れ學者の大趣意なり、

附錄三章

一物を翫へば心を失ふ、

己れがすき好む事の一途に流れざる樣に心懸くべし、

一金穀の經濟は人々能く了知すべし、

大小の祿に應じて家道を約にし、他の力を願はずして、朝暮を節し、蓄積を心懸くべし、

一飲食男女は人の大慾存ず、愼まざるべからざるなり、

酒食と婦女には大丈夫も度を失ひて、身を損し、或は義理を缺き、恥辱を取り、不和を生じ等して、終に國家を破るも有り、人々能く謹み愼むべし、

右

(35) 書自警

(林氏雜纂卷之上)

春日潛菴

心之爲物、其至靈乎、晝之所接、夜之所夢、其一理乎、晝之所接、不可不愼、夜之所夢、不可不懼矣、予晝日讀史遷貨殖傳、中夜乃夢、予居巨麗室、金貨爛漫、歷々奪眼、予心欣然、忽而夢醒、嗚呼、何其陋也、予平生自信、謂遠色賤貨、擲妻孥、

拋營產心獨潛乎如水乃不謂其卑陋至如此今而反觀內省吾猶不能自信吾確々然也夫以如此卑陋之心望進乎古人高明之域譬猶斷港絕河而望放海豈可得乎憶予往年學文章聞清人侯朝宗文雄一世心切欲觀其集日復一日一旦乃得其集呼躍而起乃夢也友人傳之以爲口實稱予篤志方是時予亦自以爲其志篤孰知其溺於文章之陋乎然而此猶慕古人之心其與夢金貨者大有庭逕然則予學豈有日退而無進者非耶不然晝之所接夜之所思不能愼而至此乎雖然所接而思所思而夢所夢而悟悟而懼懼而改果如此乎脫於卑陋進乎高明如此乎古之人惡乎不能及哉此其所以爲心之至靈也歟戊戌仲秋二十八日中夜而起書以自警

（潛菴遺稿卷之一）

(36) 同上　　同

吾不飲酒不廢業不廢業德斯進矣吾不飲酒不驕奢不驕奢德斯進矣吾不飲酒慢心不生淫心不生不慢不淫德斯進矣噫嘻日月逾邁玩愒廢弛驕奢日長慢淫日生與腐草同澌盡泯滅吾焉得爲人耶則吾甘酒而業不加修德不加進不得以爲人焉夫酒之失德如此吾不飲酒則德進矣業修矣吾庶幾得以爲人也夫書以自警戊戌孟春襄時年二十又八

（仝　上）　　佐藤一齋

(37) 謾言三首　節一

落落乾坤人亦無誰歟自古是眞儒唯名與利多爲累一過此關纔丈夫

（愛日樓詩）　　藤澤東畡

(38) 退步銘

天道益謙地道變盈退步非退是進所生

(東睦文集卷之九)

吉田松陰

(39) 士規七則

披繙冊子。嘉言如林。躍躍迫人。顧人不讀。即讀不行。苟讀而行之。則雖千萬世。不可得盡。噫復何言。雖然有所知矣。不能不言。人之至情也。古人言諸古。我言諸今。亦詎傷焉。作士規七則。

一凡生爲人。宜知人所以異於禽獸。蓋人有五倫。而君臣父子爲最大。故人之所以爲人。忠孝爲本。

一凡生。皇國宜知吾所以尊於宇內。蓋皇朝萬葉一統。邦國士大夫世襲祿位。人君養民。以續祖業。臣民忠君。以繼父志。君臣一體。忠孝一致。唯吾國爲然。

一士道莫大於義。義因勇行。勇因義長。

一士行以質實不欺爲要。以巧詐文過爲恥。光明正大。皆由是出。

一人不通古今。不師聖賢。則鄙夫耳。讀書尚友。君子之事。

一成德達材。師恩友益。居多焉。故君子愼交遊。

一死而後已四字。言簡而義廣。堅忍果決。確乎不可拔者。舍是無術也。

右士規七則。約爲三端。曰立志以爲萬事之源。撰交以輔仁義之行。讀書以稽聖賢之訓。士苟有得於此。亦可以爲成人矣。

(慨士遺音上卷)

(40) 自警詩

同

士苟得正而斃。何必明哲保身。不能見幾而作。猶當殺身成仁。道並行而不悖。百世以俟聖人。

(41) 啓發錄

去稚心

（幽室文稿卷之五）

橋本景岳

稚心とはをさな心と云ふ事にて俗にいふわらべしきことなり、菓菜の類のいまだ熟せざるをも稚といふ、稚とはすべて水くさき處ありて、物の熟して旨き味のなきを申すなり、何によらず稚といふことを離れぬ間は物の成り揚がる事なきなり、人に在りては竹馬紙鳶打毬の遊びを好み、或は石を投げ、蟲を捕ふを樂み、或は糖菓疏菜、甘旨の食物を貪り、怠惰安佚に耽り、父母の目を竊み、藝業職務を懈り、或は父母によりかゝる心を起し、或は父兄の嚴を憚りて兎角母の膝下に近づき隱るゝ事を欲する類ひ、皆幼童の水くさき心より起るとにして、幼童の間は強ひて責るに足らねども、十三四にも成り學問に志し候上にて、此心毛ほどにても殘り有之時は、何事も上達致さず、迚も天下の大豪傑と成る事は叶はぬ物にて候、源平のころ幷に元龜天正の間までは隨分十二三歳にて母に訣れ、父に暇乞して初陣など致し、手柄功名を顯し候人物も有之候、此等はみな稚心なき故なり、もし稚心あらば、親の臂の下より一寸も離れ候事は相成申間敷、まして手柄功名の立つべきよしはこれなき義なり、且つ又稚心の害ある譯は稚心を除かぬ時は士氣振はぬものにて、いつまでも腰拔士になり居り候ものにて候、故に余稚心を去るを以て士の道に入る始と存じ候なり、

振氣

氣とは人に負ぬ心立てありて、恥辱のことを無念に思ふ處より起る意

氣張の事なり、振とは折角自分と心をとゞめて振立振起し、心のなまり油斷せぬ樣に致す義なり、此氣は生ある者にはみなある者にて、禽獸にさへこれありて、禽獸にても甚しく氣の立ちたる時は人を害し人を苦しむることあり、まして人に於てをや、人の中にても士は一番此氣强く有之、故世俗にこれを士氣と唱へ、いかほど年若なる者にても兩刀を帶したる者に不禮を不致は、此士氣に畏れ候にて其人の武藝や力量や位職のみに畏れ候にてはこれなし、然る處太平久敷打續き、士風柔弱佞媚に陷り、武門に生れながら武道を忘却致し、位を望み、女色を好み、利に走り、勢に附く事のみにふけり候處より、右の人に負ぬ、恥辱のことは堪へず、と申す雄々しき丈夫の心くだけなまりて、腰にその兩刀を帶すれ、太物包をかつぎたる商人、樽を荷ひたる樽ひろひよりもおとりて、纔に雷の聲を聞き、犬の吠ゆるを聞ても卻歩する事とは成にけり、偖々可嘆之至にこそ、しかるに今の世にも猶未だ士を貴び、町人百姓抔御士樣と申し唱ふるは全く士の士たる處を貴び候にては無之哉、

君の御威光に畏服致し居候故無據貌のみを敬ひ候ことなり、其證據はむかしの士は平常に鋤鍬持士くじり致し居候得共、不斷に恥辱を知り、人の下に屈せず、心逞しき者ゆゑ、まさか事有るときは、吾　大御帝或は將軍家抔より募り召寄せられ候へば、忽ち鋤鍬打擲げて物具を帶して、千百人の長となり、虎の如く、狼の如く、軍兵ばらを指揮して、臂の指を使ふごとく致す事成れば、芳名を青史に垂れ、事敗るれば屍を原野に暴し、富貴利達、死生患難を以て其心をかへ申さぬ大勇猛大剛强の處有之ゆゑ、人々其心に感じ、其義勇に畏れ候へども、今の士は勇はなし、義は薄し、

謀略は足らず、迚も千兵萬馬の中に切り入り、縱横無碍に驅廻る事はかなふまじ、況んや帷幄の中に在て運籌決勝之大勳は望むべき所にあらず、さすれば若し腰の兩刀を奪ひ取り候へば、其心立其分別、盡く町人百姓の上には出で申まじ、百姓は平世骨折を致し居、町人は常に職業渡世に心を用ひ居候ゆゑ、今若し天下に事あらば、手柄功名は却て町人百姓より出で、福島左衞門大夫片桐助作井伊直政本多忠勝等の如き者は士よりは出申さざるべきかと思はれ、誠に嘆かはしく存する、箇樣に覺のなきものに高祿重位を被下、平生安樂に被成置候は、偖々君恩のほど申す限りなきこと、辭には盡くし難し、其御高恩を蒙りながら、不覺の士のみにて、まさかのときに我君の恥辱をさせまし候ては、返す返す恐入候次第にて、實に寐ても目も合はず、喰ても食の咽に通るべき筈にあらず、ことさら我先祖は國家へ對し奉り、聊の功も可有之候得共、其後の代々に至りては、皆々手柄なしに恩祿に浴し居候義に候へば、吾々共聊にても學問の筋心掛け、忠義の片端も、小耳に挾み候上は、何とぞ一生の中に粉骨碎身して、露滴ほどにても御恩に報い度事にて候、此忠義の心を撓まず引立て、後還り致さぬ樣に致候は、全く右の士氣を引立振起し、人の下に安ぜぬと申す事を忘れぬこと肝要に候、乍去只此氣の振立候而已にて、志立たぬ時は、折節氷の解け、醉のさむる如く、後還り致す事有之者に候、故に氣一旦振立ち候へば、方に志立て候事、甚だ大切なり、

立志

志とは心のゆく所にして我こゝろの向ひ赴き候處をいふ、士に生れて忠孝の心なき者はなし、忠孝の心有之候て、我君は御大事にて、我親は大

切なる者と申す事、聊にても合點ゆき候へば、必ず我身を愛重して、何とぞ我れこそ弓馬文學の道に達し、古代の聖賢君子英雄豪傑の如く相成り、君の御爲め働き、天下國家の御利益にも相成候大業を起し、親の名までも揚げて、醉生夢死の者にはなるまじと、直に思付候者にて、此れ即ち志の發する所なり、志を立つるときは、此心の向ふ所を急度相定め、一度右の如く思ひ詰め候へば、彌、切に其向きを立て、常々其心持を失はぬ樣に、持ちたへ候事にて候、凡そ志と申は、書物にて、大に發明致し候か、或は憤發激勵致し候歟の處より立ち定り候者にて、平生安樂無事に致し居り、心のたるみ居候時に立つ事はなし、志なき者は魂なき蟲に同じ、何時迄立ち候ても丈けのぶることなし、志一度相立ち候へば、其以後は日夜逐々成長致し行候者にて、萠芽の草に膏壤をあたへたるがごとし、古より俊傑の士と申候人とて目四つ口二つ有之にてはなし、皆其志大なると逞しきとにより、遂には天下に大名を揚げ候なり、世上の人多く碌々にて相果て候は他に非ず、其志太く逞しからぬ故なり、志立たる者は恰も江戸立を定めたる人の如し、今朝一度御城下を蹈出し候へば、今晩は今莊、明夜は木の本と申す樣に逐々先へ先へと進み行申候者なり、譬へば聖賢豪傑の地位は、江戸の如し、今日聖賢豪傑に似合ざる處を取去り候へば、如何程短才劣識にても、遂には聖賢豪傑に至らぬと申す理はこれなし、丁度足弱な者でも、一度江戸行き極め候上は、竟には江戸まで到着すると同じき事なり、偖右樣志を立て候には、物の筋多くなるとを嫌ひ候、我心は一道に取極め置き不申候はでは、戸じまりなき家の番するごとく、盜や犬が方々より忍び入り、迚も一人にては番は出來ぬな

り、まだ家の番人は隨分傭人も出來候得共、心の番人は傭人出來不申候、さすれば自分の心を一筋に致し守りよくすべき事にこそ、兎角少年の中は人々のなす事致す事に目がちり心が迷ひ候て、人が詩を作れば詩、文をかけば文、武藝とても朋友に鎗を精出す者あれば、我今日まで習ひ居たる太刀業を止めて鎗と申す樣に成り度きものにて、これは正覺取らぬ第一の病限なり、故に先づ我智識聊にても開け候はゞ、篤と我心に計り、吾所向所爲をさだめ、其上にて師につき友に謀り、吾及ばぬ足らはぬ處を補ひ、其極め置きたる處に心を定めて、心多端に流れて多岐亡羊の失なからんことを願はしく候、凡て心の迷ふは、心の幾筋にも分れ候處より起り候事にて、心の紛亂致し候は、吾志未だ一定せぬ故なり、心定まらず心收まらずしては、聖賢豪傑には成られぬものにて候、何分志を立つる近道は經書又は歷史の中にて吾心に大に感徹致し候處を書抜き壁に貼し置き候か、又は扇抔に認め置き、日夜朝暮夫を認め咏め、吾身を省察して其不及を勉め、其進を樂み居り候事肝要にして、志既に立ち候時は學を勉むる事なければ、志彌〻ふとく逞くならずして、動もすれば聰明は前時より減し、道德は初の心に慚づる樣に成り行くものにて候、

勉學

學とはならふと申す事にて、總てよき人すぐれたる人の善き行ひ、善き事業を迹付して、習ひ參るをいふ、故に忠義孝行の事を見ては、直に其人の忠義孝行を慕ひ倣ひ、吾も急度其人の忠義孝行に負けず劣らず勉め行き候事學の第一義なり、然るを後世に至り、字義を誤り、詩文や讀書を學と心得候は、笑かしき事どもなり、詩文や讀書は右學問の具と申すも

のにて、刀の櫺鞘を刀と心得、階梯を二階と存候と同じ、淺鹵粗麤の至り
に候、學と申すは忠孝の筋と文武の業とより外には無之、君に忠を竭し
親に孝を盡すの眞心を以て文武の事を骨折勉强致し、御治世の時には
御側に被召使候へば、君の御過を補ひ匡し、御德を彌增に盛んになし奉
り、御役人となり候時は、其役所の事、首尾能く取修め、依怙贔屓不致、賄賂
請謁を不受、公平廉直にして、其一局何れも其威に畏れ、其德に懷き候程の
仕業をなし可申義を平世に心掛け居り、不幸にして亂世に逢ひ候はゞ、
各々我居場所の任を果して、寇賊を討平げ、禍亂を克く定め可申、或は太刀
鎗の功名、組打の手柄致し、或は陣屋の中にありて謀略を賛畫して敵を鏖
にし、或は兵糧小荷駄の奉行となりて萬兵の飢渴不致、兵力の不減樣に
心配致し候事抔、兼々練修可致義に候、此等の事を致し候には、胸に古今
を包み、腹に形勢機略を諳じ藏め居らずしては叶はぬ事共多く候へば、
學問を專務として勉め行ふべきは讀書して吾知識を明かに致し、吾心
膽を練り候事肝要に候、然る處年少の間は兎角打續き業に就き居候事
を厭ひ、忽ち讀み忽ち廢し、忽ち習文、忽ち講武といふ樣に暫く宛にて倦
怠致す者なり、此れ甚だ不宜、勉と申すは力を推究め、打續き推遂候處の
氣味有之字にて、何分久を積み、思を詰め不申候はでは、萬事功は見え不
申候、況て學問は物の理を說き、筋を明かにする義に候へば、右の如く輕
忽粗麤の致し方にて眞の道義は見え不申、中々有用實着の學問にはな
り申さぬなり、且つ又世間には愚俗多く候故、學問を致し候と兎角驕謾
の心起り、浮調子に成て、或は功名富貴に念動き、才氣聰明に伐り、度病折
々出來候ものにて候、これを自ら愼み可申は勿論に候へども、茲には良

友の規箴至て肝要に候間何分交友を擇み君仁を輔け吾德を足し候工夫可有之候

擇朋友

交友は吾連朋友の事にて擇とはすぐり出す意なり吾同門同里の人同年輩の人吾と交りくれ候へば何れも大切にすべし乍去其中に損友益友候へば則ち擇と申す事肝要なり損友は吾に得たる道を以て其人の不正の事を矯直し可遣益友は吾より親みを求め事を諮り常に兄弟の如くすべし世の中に益友ほど難有難得者はなく候間一人にても有之ば何分大切にすべし總て友に交るに飲食歡娛の上にて附合遊山釣魚にて狎合は不宜學問の講究武事の練習士たる志の研究心合の吟味より交を納れ可申事に候飲食遊山にて狎合候朋友は其平生は腕を扼り肩を拍ち互に知己知己と稱し居候へ共無事の時吾德を補ふに足らず有事の時危難を救ひくれ候者にてはなし これは成り丈屢出會不致吾身を嚴重に致し附合候て必ず狎昵致し吾道を褻さぬ樣にして何とか工夫を凝して其者を正道に導き武道學問の筋に勸め込み候事友道なり偖益友と申すは兎角氣遣な物にて折々不面白事有之候夫を篤と了簡致すべし益友の吾身に補ひあるは全く其氣遣なる處にて候士有爭友雖無道不失令名と申すと經に有之候爭友とは即益友也吾過を告げ知らせ我を規諫致しくれ候てこそ吾氣の附ぬ處の落も缺も補ひたし候事相叶ひ候なり若し右の益友の異見を嫌ひ候時は天子諸侯にして諫臣を御疎みなされ候同樣にて遂には刑戮にも罹り不測の禍をも招く事あるべきなり偖て益友の見立方は其人剛正毅直なるか溫良篤

實なるか、豪壯英果なるか、俊邁亮明なるか、濶達大度なるかの、五つに出でず、此等は何れも氣遣多き人にて、世間の俗人どもは甚しく厭棄致し居候者なり、彼損友は佞柔善媚、阿諛逢迎を旨として、浮躁辯慧、輕忽粗慢の性質ある者なり、此れは何れも心安く成り易き人にて、世間の女子小人ども、其才智や人品を譽め居候者なれども、聖賢豪傑たらんと思ふ者は、其所擇自ら在る所あるべし、

以上五目は少年學に入るの門戸とこゝろえ書き聯ね申候者なり、

右余嚴父の敎を受け、常に書史に涉り候處、性質疎直にして柔慢なる故、遂に進學の期なき樣に存し、每夜臥衾中にて涕泗にむせび、何とぞして吾身を立て、父母の名を顯し、行々君の御用に相立ち、祖先の遺烈を世に輝し度と存居候折柄、逐々吾身に解得致し候事ども有之候樣覺え申すに付、咿書き記し、後日の遺忘に備ふ、敢て人に示す處にあらず、嗚呼如何せん吾身刀圭の家に生れ、賤技に局々として、吾初年の志を遂る事を不得を、然れども所業は此に在りても、所志は彼に在り候へば、後世吾心を知り、吾志を憐み、吾道を信ずる者あらん歟、

西郷南洲

(24) 遺訓

一廟堂に立ちて大政を爲すは天道を行ふものなれば、些とも私を挾みては濟まぬものなり、いかにも心を公平に操り、正道を踏み、廣く賢人を撰擧し、能く其職に任ゆる人を擧げて政柄を執らしむるは即ち天意なり、夫れゆゑ眞に賢人と認る以上は直に我が職を讓る程ならでは叶はぬ者ぞ、故に何程國家に勳勞ある共、其職に任へぬ人を官職を以て賞するは善からぬ事の第一なり、

一事大小と無く、正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆ可からず、人多くは事の指支ゆる時に臨み、策畧を用て一旦其の指支を通せば、跡は時宜次第工夫の出來る樣に思へども、策畧の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ、正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる樣なれども、先きに行けば成功は早きものなり、

一廣く各國の制度を採り、開明に進まんとならば、先づ我國の本體を居へ、風教を張り、然して後徐かに彼の長所を斟酌するものぞ、否らずして、猥りに彼れに效ひなば、國體は衰頽し、風教は萎靡して、匡救す可からず、終に彼の制を受くるに至らんとす、

一道は天地自然の道なるゆゑ、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修ずるに克己を以て終始せよ、己れに克つの極功は毋意毋必毋固毋我と云へり、總じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝぞ、能く古今の人物を見よ、事業を創起する人、其事大抵十に七八迄は能く成し得れども、殘り二つの終り迄成し得る人の希れなるは、始は能く己れを愼み事をも敬する故功も立ち名も顯るゝなり、功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒愼の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其成し得たる事業を負み、苟も我が事を仕遂んとて、まづき仕事に陷いり、終に敗るゝものにて皆な自ら招くなり、故に己れに克ちて睹ず聞かざる所に戒愼するものなり、

一道は天地自然の物にして人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす、天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり、

一人を相手にせず、天を相手にせよ、天を相手にして己れを盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし、

一己れを愛するは善からぬことの第一なり、修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むる事の出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆な自ら愛するが爲なれば、決して己れを愛せぬものなり、

一過ちを改るに、自ら過つたとさへ思ひ付かば、夫れにて善し、其事をば棄てゝ顧みず、直に一歩踏出すべし、過を悔しく思ひ取繕はんとて、心配するは、譬へば茶碗を割り、其の缺けを集め、合せ見るも同じにて、詮も無き事なり、

一道を行ふ者は固より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否身の死生抔に少しも關係せぬものなり、事には上手下手あり、物には出來る人出來ざる人あるより自然心を動かす人も有れども、人は道を行ふものゆゑ道を踏むには上手下手も無く出來ざる人も無し、故に只管ら道を行ひ、道を樂み、若し艱難に逢ふて之を凌がんとならば、彌々道を行ひ道を樂むべし、予壯年より艱難と云ふ艱難に罹りしゆゑ今はどんな事に出會ふとも動搖は致すまじ、夫れだけは仕合せなり、

一命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ人は始末に困る者なり、此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業を成し得られぬなり、云云、

一道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らざるとせず、天下擧つて譽るも足れりとせざるは、自ら信ずるの厚さが故なり、

一平日道を蹈まざる人は事に臨んで狼狽し、處分の出來ぬものなり、譬へば、近隣に出火あらんに平生處分ある者は動搖せずして取始末も能く出來るなり、平日處分なき者は、唯、狼狽して中々取始末どころには之れなきぞ、夫れも同じにて平生道を蹈み居る者にあらざれば事に臨んで策は出來ぬものなり、

一聖賢にならんと欲する志なく、古人の事跡を見、迚も企て及ばぬと云ふ樣なる心ならば、戰に臨んで逃ぐるより猶ほ卑怯なり、朱子も白刃を見て逃ぐる者はどうもならぬと云はれたり、誠意を以て聖賢の書を讀み、其の處分せられたる心を身に體し、心に驗する修行致さず、唯、个樣の言个樣の事と云ふのみを知りたるとも、何の詮なき者なり、予今日人の論を聞くに何程尤もに論ずるとも處分に心行き渡らず、唯、口舌の上のみならば、少しも感ずる心之なし、眞に其の處分ある人を見れば、實に感じ入るなり、聖賢の書を空く讀むのみならば、譬へば人の劒術を傍觀するも同じにて、少しも自分に得心出來ず、自分に得心出來ずば、萬一立ち合へと申されし時逃ぐるより外あるまじきなり、一天下後世迄も信仰悅服せらるゝものは、只是一箇の眞誠なり、古より父の仇を討ちし人其數擧げて數へがたき中に獨り曾我の兄弟のみ今に至りて兒童婦女子迄も知らざる者のあらざるは、衆に秀てゝ誠の篤き故なり、誠ならずして世に譽められるゝは僥倖の譽なり、誠篤ければ縱令ひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり、

一世人の唱ふる機會とは多くは僥倖の仕當てたるを言ふ、眞の機會は理を盡くして行ひ勢を審かにして動くと云ふに在り、平日國天下を

憂ふる誠心厚からずして、只時めはつみに乘じて成し得たる事業は、決して永續せぬものぞ、

一今の人才識有れば事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は危くして見て居られぬものぞ、體有りてこそ川は行はるゝなり、

(43) 偶作二首　横井小楠

帝生萬物靈、使之亮天功、所以志趣大、神飛六合中、
道既無形躰、心何有拘泥、達人能明了、渾順天地勢、

(44) 送左大二姪洋行　同

明堯舜孔子之道、盡西洋器械之術、何止富國、何止强兵、布大義於天下耳、（小楠遺稿）

(45) 示某生　山田方谷

吾氣浩然同大虛、何曾半點落形軀、纔持私見分彼我、究竟鍛成小丈夫、（方谷遺稿卷下）

(46)　佐久間象山

一予年二十以後、乃ち知る匹夫も一國に繫るあるを、三十以後、乃ち知る天下に繫るあるを、四十以後、乃ち知る五世界に繫るあるを、

二日晷一たび移れば、千歲再來の今なし、形神既に離るれば、萬古再生の我なし、學藝事業、豈に悠々なるべけんや、

三

人の己れを譽むる、己れに於て何をか加へん、若し譽に因りて自ら怠らば則ち反りて損す、人の己れを毀る、己れに於て何をか損せん、若し毀によりて自ら強うせば則ち反りて益せん、

四

身に規矩を行へば則ち嚴ならざるべからず、此れ己れを治むるの方なり、己れを治むる即ち人を治むる所以、人に規矩を待てば則ち嚴に過ぐべからず、此れ人を安んずるの道なり、人を安んずる即ち自ら安んずる所以、

五

書を讀み學を講じ、徒に空言をなし、當時の務に及ばざれば、清談事を廢すると一間のみ、

一人と生れては、高きも賤きもせねばならぬものは、學問なり、學問せねば、吾身に生れつきたる善ある事も、えしらず、まして他の人の德あるもなきも、辨へず、又昔を盛なりとも、今を衰へたりとも、しらずいたづらに五穀を食ひて前むきあゆむばかりわざにて犬猫といはんも同じ事なり、

一學業は志才氣の三つなければ成就せず、まづ士たらんものは、志を高く大に立つべし、志を高大に立つれば、おのづから才もますものなり、才あれば讀書の勤めはさらなり、萬事の學習おもふ樣になるなり、左樣に勤むれば知見日々に廣くなりて氣もつよく、精神もさはやかに

なる氣力つよくなれば、又おのづから志も大くなり、志大くなるまゝに才もまさり、才まさるまゝに、氣はいよ〳〵つよくなりゆくなり、此三つのもの相互にたすけて、學業はおもはずしらず成就す、固より學業といふもの外のものにあらず、人たる道を知りて人たる事業をなさん爲めなり、四民の内にて士といふものは、心を勞して君を輔け、天下國家を平治すべきものなれば、學問なくては、一日も立つべからず、士の重ずる事は節義なり、節義はたとへていへば人の體に骨あるが如し、骨なければ首も正しく上に在ることをえず、手も物を取る事をえず、足も立つ事をえずされば人は才能ありて學問ありても、節義なければ世に立つことを得ず、節義あれば不骨不調法にても士たるだけの事には、事かゞぬなり、

一威儀は正しくあらまほしきわざなり、おそるべきを威といひ、のりとるべきを儀といふとありて、士たるものゝ疎放輕躁なるはいかにも見ぐるしきものなり、固より德の外にあらはるゝ威儀なれば、威儀きにて其人の胸中も見え渡るなり、されば衣冠正しく美麗にかざりたてゝも、左顧右眄、きよろきよろする人は位高くしても、おそるべき容儀なし、畢竟德なきゆゑの事なれど、せめては威儀のみにても心を用れば衣冠に恥をあたへ侍るだけの罪はのがるべし、よろづの事内外とわかれたるものなるが、内の德を養ふものはかならず外の儀を正しくす、外の儀を正しくするものは、必ず内の德を養ふ、動搖周旋おもゝ〳〵しく、拜揖辭氣をおもむろにするは、德を養ふ爲めなり、

一胸懷は洒落とあらまほしき事なり、是れは大かた人の資質による事

なれど、平生の習にても如何にもなるものなり、德あるもの、先づは洒落なるものなれど、おのづから一箇の工夫ありと覺え待る、石勒が大丈夫磊々落々として日月の皓然たる如くなるべしといへる、おもしろき辭なり、末の世の習にて、兎角胷襟狹隘、懷抱忌刻にして、萬事に疑猜おほく能くきのきゝたる樣なれども、せは〳〵敷して人も嫌ひ、吾身もとかう氣遣おほく苦心することあり、とても世にあらんかぎり首尾きづかひのみせんも無益の事なり、丈夫たらんものは世俗に所謂大竹をうちわりたらん樣に磊塊洒落とあれば、出て人に交り、入りて家人に接するに、おのづから彼れよりも吾れに化して、忌刻なるものもさら〳〵となるものなり、一生涯にていかばかりの得なるべき、これ長壽を祈る一助にもなりぬべし、

一人の世に生れたるは禽獸草木の死生榮枯するとはちがひて、四民とり〳〵に世に益ある樣にあるべき事なり、まして士は耕作もせず、器械も造らず、力を勞する事なければ、一入世になに事ぞ益ある樣の事して其功遺すべきわざなり、されば才斷量慮の四德を養ふべし、學問するはヶ樣の德を養ふ爲めなれど、わけて心を用ひて養ひ成すべし、さて才といふものは何にてもその事をなすを才といひて、詩の才文の才或書畫の才などさま〳〵あれど、此にいふ才は幹旋の才といふて人事をなす才なり、いかばかり善き人にても、いか程の德ありても、人として此幹旋の才なきものは世の用に立つことなく、無用物なり、たとひ無學にても此幹旋の才あるものは何事にあたりても功をなし用立つなり、

一人の文武あるは鳥の左右の翼あるがごとし、かならずかたゝならぬ樣にあるべし、

一天も誠にて天たり、地も誠にて地たり、日月星辰の運び、四時のうつりかはるも誠なり、山嶽河海の安然たるも洋乎たるも誠なり、兩間に生々死々するもの皆一つの誠にてする事なり、草木の花さき實のるも、鳥獸の走り鳴くも、又誠なり、人の生まるゝ、固り誠なり、其知覺運動する、目の物を照し、耳の聲を聞く、すべて誠なり、此の如く誠の中に生活して誠の中に行立する者なれば、君臣となり、父子となり、兄弟となり、夫婦となり、朋友となる、親義別序信の道いかでか虛にて行ふべきか、ならず一筋の誠にて爲すべき事なり、はつかに其間に私欲まじれば、きず付きて誠ならず、誠ならねば虛にて感動する事なく、親義別序信もすべて名のみとなるなり、萬の事誠なければならず、よろしき酒も水を雜ふれば下戸も醉はず、あしき酒にても醇なれば上戸も酩酊に至るが如し、中庸に誠なければ物なしといへる道理にて、なに事にても誠實の心なければたとひ其事なりたりとも、ならざる如し、固よりなるべき道理もなし、さて誠は天地萬物の差別なく同じ誠なり、況や人は天地人三才と天地にさしつゝきての人なれば誠といひても萬物より一入醇粹にあるべき道理なり、されば人の誠は萬物の誠よりも天地に感通し易し、云云、されば人たるものは只一片の實心にて實事を行ふべき事なり、家內日用瑣末の事にても、かならず虛僞をおもはず、虛僞をいはず、虛僞をせず、二六時中の間、始中終の事、上につかふるにも、下に交はるにも只此心得肝要と思ふべし、末の世となりては、

狡黠なるものもおほく實心なるものを愚昧の樣にいひおとし或は嘲弄するものあれど左樣の人は必ず天地よりも棄てられし人なれば得失を論ずるにたらず彼れ是れと論ずれば却て吾れの誠に疵付くれば臭きものをよけて通る樣に吾より避くべき事なり、

（紫灘遺稿卷上）

中村敬宇

(48) 愛敬歌

致愛敬盡愛敬順境何足言逆境可錬性使親非頑嚚何見舜德盛使君非殷紂何見三仁行西聖瑣刺底其妻性頑硬拂意動輙怒万事悖命令他人娶若婦其必謀再娉瑣謂此乃福幸受此暴横理學根脚堅試驗要風勁妻氣百變動瑣性一泰定妻躁情如火瑣靜心如鏡祇因愛敬深後世稱爲聖吁嗟此二字勢力存百勝愈銑艦巨砲超千軍万乘況且似鏈鎖操執合一柄能懷柔攜貳能馴化梟獍構兵息秦楚交惡和周鄭四海可一家六合可同姓嗟々今世人子弟缺溫清夫妻相反目朋友互訴病至邦國交際當以兵力競妖氛滿神州何時得洗淨愛敬盡事親德教四海亘千年口徒誦今日未見應致愛敬盡愛敬一人德兆民慶小家法大國政勿怠忽宜敬聽此二字神攸命

（愛敬唱和）

(49) 謹言箴

同

泰西有云造化造人兩耳兩目兩手兩足鼻孔亦偶唯一其口口又有齒有似城壘其外有脣有似郭門百爾君子以此可知聞見欲多語言欲稀泰西此說吾極喜之喜其切人非喜其奇

（敬宇文集卷之十五）

(50) 誡書生

勝安芳

人難に臨み死を畏るゝは固より鄙むべし然れども速に死するを以て快となすものも亦貴ぶに足らず本邦人は性慓急にして動もすれば輙ち死を決す是れ其弊なり吾れ嘗て謂ふ我邦の武士は元龜天正の際より盛なるはなしと然れども當時の風尙は一死身を潔くするを以て事畢はるとなし復た後患を顧みず夫れ萬般の責任を一身に擔はんと欲せば至難至難に堪へ綽々として餘裕あるものにあらざるよりは能はざるなり嗚呼幕政の末造に方り生死の途に出入し窮厄を踏み心膽を練り終に皇政維新の洪業を成したるものは既に黃土に歸せり今の局に當るものは概ね其支孽のみ此後十年當に庶務を調理し國威を振揚すべきものは汝等書生の肩頭に懸る汝等果して能く此重任に耐ふるか否らざるか予が見る所を以てすれば近時の書生は僅に一二の學科を修め多少の智識を具ふるに過ぎず而して天下は一大活物にして區々たる死學問小才子の能く辨ずる所にあらず必ずや世間の慘風を凌ぎ人生の酸味に飽き世態を知り人情を盡して然る後與に經世の要務を談ずべし吾れ後進の輩に告ぐ宜しく身を困約に投じ實才を死生の際に磨くべきのみ

(51) 修身二十則

山岡鐵舟

一　うそいふ可からず候、

二　君の御恩は忘る可からず候、

三　父母の御恩は忘る可からず候、

四　師の御恩は忘る可らず候、

五　人の御恩は忘る可からず候、

六　神佛並に長者を粗末にす可からず候、
七　幼者をあなどる可からず候、
八　己れに心よからざることは他人に求む可からず候、
九　腹を立つるは、道にあらず候、
十　何事も不幸を喜ぶ可からず候、
十一　力の及ぶ限りは、善き方につくす可く候、
十二　他をかへりみずして、自分の善き事ばかりす可からず候、
十三　食するたびに、かしよくのかんなんを思ふ可し、すべて草木土石にても、粗末にす可からず候、
十四　殊更に着物をかざり、或はうはべをつくらふものは、心ににごりあるものと心得可く候、
十五　禮儀を亂る可からず候、
十六　何時何人に接するも、客人に接する樣に心得可く候、
十七　己れの知らざる事は何人にもならふ可く候、
十八　名利の爲めに、學問技藝す可からず候、
十九　人にはすべて、能不能あり、いちがいに人をすて、或はわらふ可からず候、
二十　己れの善行を、ほこりがほに人に知らしむ可からず、すべて我心に恥ぢざるに務む可く候、

（鐵舟遺稿）

（二）支那の部

(52) 座右銘　崔瑗

無道人之短、無說己之長、施人慎勿念、受施慎勿忘、世譽不足慕、唯仁爲紀綱、隱心而後動、謗議庸何傷、無使名過實、守愚聖所臧、在涅貴不淄、曖曖內含光、柔弱生之徒、老氏誡剛彊、行行鄙夫志、悠悠故難量、慎言節飲食、知足勝不祥、行之苟有恒、久久自芬芳、

(文選卷五十六)

(53) 續座右銘 并序　白樂天

崔子玉座右銘、余竊慕之、雖未能盡行、常書屋壁、然其間似有未盡者、因續爲座右銘云、

勿慕貴與富、勿憂賤與貧、自問道如何、貴賤安足云、聞毀勿戚戚、聞譽勿欣欣、自顧行何如、毀譽安足論、無以意傲物、以遠辱於人、無以色求事、以自重其身、遊與邪分岐、居與正爲鄰、於中有取捨、此外無疎親、修外以及內、靜養和與眞、養內不遺外、動率義與仁、千里始足下、高山起微塵、吾道亦如此、行之貴日新、不敢規他人、聊自書諸紳、終身且自勗、身歿貽後昆、後昆苟反是、非我之子孫、

(白氏長慶集卷三十九)

(54) 續座右銘 并序　李至

崔子玉爲座右銘、白樂天亦爲座右銘、檢身之道幾乎殫矣、予嘗冥心讖坐、自思所爲、慮向之益友以予位著不我規也、因疏其所得、亦命爲座右銘、聊以自勉、其辭曰、

短不可譏、譏則終短、長不可矜、矜則不長、尤人不如尤己、好圓不如好方、用晦則天下莫與汝爭、智、撝謙則天下莫與汝爭、強、多言者老氏所戒、欲訥者仲尼所臧、妄動有悔、何如靜而勿動、太剛則折、何如柔而勿剛、吾見進而不已者敗、未見退而自足者亡、爲善則遊君子之域、爲惡則入小人之鄉、吾將書紳帶以

自警、刻盤盂而過防、豈如長存於座右、庶夙夜之不忘、

（文林明辯卷四十七）

(55) 座右銘

張思叔

凡語必忠信、凡行必篤敬、飲食必愼節、字畫必楷正、容貌必端莊、衣冠肅整、步履必安詳、居處必正靜、作事必謀始、出言必顧行、常德必固持、然諾必重應、見善如己出、見惡如己病、

凡此十四者、我皆未深省、書此當座隅、朝夕視爲警、

（小學卷之五）

(56) 座右戒

范謙益

一

一、不言朝廷利害、邊報差除、

二、不言州縣官員長短得失、

三、不言衆人所作過惡、

四、不言仕進官職、趨時附勢、

五、不言財利多少、厭貧求富、

六、不言淫媟戲嫚、評論女色、

七、不言求覓人物、干索酒食、

二

一、人附書信、不可開拆沈滯、

二、與人並坐、不可窺人私書、

三、凡入人家、不可看人文字、

四、凡借人物、不可損壞不還、

五、凡喫飲食、不可揀擇去取、

六、與人同處、不可自擇便利、

七、見人富貴、不可歎羨詆毀、

凡此數事、有犯之者、足以見用意之不肖、於存心修身、大有所害、因書以自警、

（小學卷之五）

程伊川

(57) 四箴

顏淵問克己復禮之目、孔子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、四者身之用也、由乎中而應乎外、制乎外、所以養其中也、顏淵事斯語、所以進於聖人、後之學聖人者、宜服膺而勿失也、因箴以自警、

一、視箴

心兮本虛、應物無迹、操之有要、視爲之則、蔽交於前、其中則遷、制之於外、以安其內、克己復禮、久而誠矣、

二、聽箴

人有秉彝、本乎天性、知誘物化、遂亡其正、卓彼先覺、知止有定、閑邪存誠、非禮勿聽、

三、言箴

人心之動、因言以宣、發禁躁妄、內斯靜專、矧是樞機、興戎出好、吉凶榮辱、惟其所召、傷易則誕、傷煩則支、己肆物忤、出悖來違、非法不道、欽哉訓辭、

四、動箴

哲人知幾、誠之於思、志士勵行、守之於爲、順理則裕、從欲惟危、造次克念、戰競自持、習與性成、聖賢同歸、

(58)白鹿洞書院揭示　（二程全書卷之六十二）　朱文公

父子有親。
君臣有義。
夫婦有別。
長幼有序。
朋友有信。

右五教之目。堯舜使契爲司徒。敬敷五教。卽此是也。學者學此而已。而其所以學之之序。亦有五焉。其別如左。

博學之。
審問之。
愼思之。
明辯之。
篤行之。

右爲學之序。學問思辨。四者所以究理也。若夫篤行之事。則自修身以至于處事接物。亦各有要。其別如左。

言忠信。行篤敬。
懲忿窒欲。遷善改過。

右修身之要

正其義不謀其利。
明其道不計其功。

右處事之要

己所不欲勿施於人。
行有不得反求諸己。
右接物之要

(59) 勸學文　同

勿謂今日不學而有來日勿謂今年不學而有來年日月逝矣歲不我延嗚呼老矣是誰之愆

(60) 六諭　清康熙帝

孝順父母。
尊敬長上。
和睦鄉里。
教訓子孫。
各安生理。
毋作非爲。

(三)西洋の部

(61) 座右銘　フランクリン

一、節制　もの、うく、なるまで食ふこと、なかれ、醉ふまで飲むこと、なかれ。
二、沈默　自他のためになり得べきことの外は言ふことなかれ、用もなき雜談を避けよ。
三、秩序　物は總てよくこれを整頓せよ、仕事はそれ〳〵時を違へずこれをなせ。
四、決心　己が當になすべきことはなさんと決心せよ、一旦決心したることは必ずなし遂げよ。

五、儉約　自他の爲めになることの外に金錢を費すことなかれ、即ち無益に費すことなかれ。

六、勤勉　みだりに時を費すことなかれ、斷えず何か有益なることに從事せよ、一切無益の動作を休めよ。

七、誠實　詐術を用ふることなかれ、潔白に正直に考へよ、話すときにも、また然かせよ。

八、正義　損害を加ふることにより、若くは己が本務を怠ることにより、他人に禍を及ぼすことなかれ。

九、中和　極端を避けよ、損害を受けたるが爲めに怒ることなかれ、假令ひ怒るべき價値はありとも。

十、清潔　身體、衣服、住居を決して不潔にすることなかれ。

十一、沈着　瑣々たる事や普通若くは必至の事變に心を動かすことなかれ。

十二、貞操……

十三、謙遜　イエス(耶蘇)とソクラテースとを學べよ。

（フランクリン傳）

第九篇　先哲遺訓

第一　日本の部

一

聖德太子曰く、人尤惡なるはなし、能く敎ふれば、之れに從ふ、

二

菅公曰く、未だ曾て邪、正に勝たず、

三

貝原益軒曰く、人、生まれて學ばざれば、生れざると同じ、學んで道を知らざれば、學ばざると同じ、知りて行ふと能はざれば、知らざると同じ、故に人たるもの必ず學ばざるべからず、學をなすものは、必ず道を知らざるべからず、道を知るものは、必ず行はざるべからず、道を知ることは至りて難し、古より英才敦厚の士多からずとせず、然れども道を知るもの鮮し、學問思辨の功、闕くべからざる所以なり、

四

又曰く、心を平にし、氣を和にす、是れ身を養ひ、德を養ふの工夫、

五

又曰く、人生百歲に滿たず、豈に放蕩にして日を曠うして空しく斯生を過ごすことを惜まざるべけんや、古人の曰く、天地萬古あり、此身再び得られず、人生只百年、此日最も過ぎ易し、幸に其間に生まるゝもの、有生の樂を知らざるべからず、又虛生の憂を懷かざるべからず、此言時に省みるべし、

六

伊藤仁齋曰く、積疑の下大悟あり、大悟の下奇特なし、

七

大高坂芝山曾て適從錄を著はして、以て仁齋を駁す、門人携へ來たりて之れを示して曰く、先生之れが辨を作れと、仁齋笑つて言はず、門人曰く、人、書を著はして以て恣に己れを議す、苟も辭塞がらずんば、豈に默して止むべけんや、先生にして答へざれば、請ふ余代はりて之れを折かん、仁齋曰く、君子は爭ふ所なし、若し彼れ果して是に、我れ果して非ならば、彼れ我れに於て益友たり、若し我れ果して是に、彼れ果して非ならば、他日彼れ其學長進せば、則ち當に自ら之れを知るべし、小子宜く深く之れを戒むべし、學をなすの要は、唯、心を虛にし、氣を平にし、己れが爲めにするを以て先となす、何ぞ彼れを毀り、我れを立て、徒らに茲の多口を增さん、

八

莊田琳菴曰く、學は當に水を習ふが如くなるべし、之れを淺處に習ふて後深きに向ひ、沒溺死せんと欲するもの數次、方に始めて功を見る、若し其溺を懼れて淺處を離れ得て了はらざれば、終身水にあるも、亦數尺の水を游泳すること能はず、

九

木村蓬萊曰く、己れ不善にして人之れを譽むるも、以て善となすに足らず、己れ善にして人之れを毀るも以て憂となすに足らず、

十

小倉三省曰く、一命の士苟も心を物を愛するに存せば、則ち人に於て必ず濟ふことあらん、

十一

吉益東洞曰く、大丈夫良相とならざれば、必ず良醫とならん、

十二

林春齋曰く、武人兵を執りて、戰ひ死を效して功を建つ、學者書を讀み言を立て、爲めに性命を隕すは、固より其望む所なり、

十三

辛島鹽井曰く、窮達は命なり、吾れ奚ぞ預からん、吾れ我れにあるものを盡くすのみ、

十四

川井東村曰く、往日の蹤を追ふこと莫れ、來日の杳なるを迓ふること莫れ、唯、一日目下善をなすを勉むるのみ、是の如くにして後、積み歲月を度ること久しければ、則ち自然に習慣し、善斯に性をなさん、

十五

河村瑞軒、新井白石と忘年の交をなす、一日白石に謂つて曰く、吾子今日に至るまで死を決すること幾たびありや、白石答へて曰く、僕、人と恐諍し、死を決すること兩三、瑞軒乃ち告げて曰く、吾子當時死を決するもの、皆不可なり、何んとなれば、今死せずして生けるを視る、則ち蓋し以て死なかるべきものなり、夫れ以て死なかるべくして、尙ほ死を決することと此の如し、請ふ今よりして後、吾子心を專にし、志を致し、以て死を文學に決せよ、

十六

角田東水曰く、志士溝壑にあるを忘れず、勇士其元を喪ふを忘れず、乃ち予の志なり、

十七

紀平洲常に門人に告げて曰く、學思相須つは聖人の教なり、故に居常小事と雖も、熟思して苟もせず、機得られ理到るに迄んでは、則ち大事と雖も、必ず勇往して疑はず、

十八

中江藤樹曰く、夫れ學問は心の汚れを清め、身の行を能くするを本實とす、

十九

或る人物徂徠に問ふて曰く、先生講學の外何をか好むと、徂徠答へて曰く、余他の嗜玩なし、唯、炒豆を嚙んで、宇宙間の人物を詆毀するのみ、

二十

原田東岳曰く、人の己れを毀る、當にこれを躬に求むべし、若し己れ毀るべきの行あらば、彼れが言是なり、是ならば、但、彼れに怨みなきのみならず、反りて改むべきの行あり、若し己れ毀るべきの行なくんば、彼れの言妄なり、妄ならば只、躬に害なきのみならず、反りて進修の益あり、爰に知る、謗るもの必ずしも吾れを損せず、而して譽むるもの必ずしも吾れを益せず、學者毀譽を以て遽に擧動をなすべからずして、自ら其害を釋ぬべし、

二十一

奥貫友山曰く、獨り閑窓に坐して、聖賢の書を讀み、義理に涵濡すれば、架上萬卷の書、案上一椀の茶、恰も五鼎七牢の左右に饋るが如し、敢て一物を左右に求めず、

二十二

栗山潜鋒曰く、寧ろ虎となりて早く死するも、鼠となりて長生することなかれ、

二十三

貝原益軒曰く、顏之推が曰く、人生得がたし、空しく過ごす勿れと、斯言旨あるかな、蓋し群生の中、人たること難しとなす、且つ再び生まるゝこと能はず、豈に空しく此生を過ごすべけんや、惜むべし、醉生夢死し、枉げて一生を過ごすこと、苟も人となりて人道を聞くこと能はざれば、長生不死と雖も、空しく過ごすとなす、然らば則ち人となりては、則ち須らく道を聞くことを要むべし、道を聞くの工夫、又唯能く學ぶにあるのみ、

二十四

又曰く、學をなすこと專一ならざれば、其志立たず、其功成らず、故に學は專一を貴ぶ、

二十五

又曰く、衆人の人たる、草木禽獸の物たると、其生は異にして、其死は同じ、何んとなれば、衆人下愚と雖も、其生ける時、亦皆五品の交、四民の業あり、且つ衣食の養、屋室の安あり、誠に禽獸と同じからず、其既に死するに迨んでや、一に腐壞に歸す、德行の人に遺すとなく、令名の世に傳ふ

ることなし、一時に漸し盡して餘りあることなく、草木禽獸と異なることなし、人たる者、豈に之れを恥づることを知らざるべけんや、如し之れを恥づれば、學をなすに如くはなし、學んで得ることあれば、德澤功名、後世に流れて滅びず、虛しく生れずとなす、此れ君子沒して後、衆人及び禽獸草木に異なる所以なり。

二十六

中江藤樹曰く、君子安樂の本躰は、吾人方寸の內にあり、

二十七

又曰く、夫れ師範の官は、本を隱微に立てゝ、道を講論に生ず、

二十八

陶山鈍翁曰く、重遲深沈のものは能く大事を處す、輕躁淺卒のものは、小事を處することと能はず、然らば則ち事々物々、輕卒に之れを遇すべからず、至微至易のものと雖も、當に重沈を以て之を視るべし、

二十九

向井滄洲曰く、子弟を敎育する、宜しく我躬之れに先んずべし、德以て經となし、才以て緯となす、二つのもの居敬に始まる、

三十

伊藤竹里曰く、心平に氣和すれば、溫柔と雖も、强毅奪ふべからざるの力あり、公を秉り、正を持すれば、迂遠と雖も、透徹拘すべからざるの權あり、以て人物を語るべく、以て世務を言ふべし、

三十一

木下蘭皐曰く、凡そ天下の事は、曲藝小技の最も下なるものと雖も、必ず

學んで後之れに通ず、而るを況んや己れを修め人を治むるの道に於てをや、今の太夫苟も其道を學ばず、徒に己れの智力を以て衆庶を制御し、自ら之れを臆に斷ずるは、譬へば、猶ほ有力の曾て射御の術を學ばずして、彎強を好み、悍馬に騎するがごとし、以て射れば激發し、以て發すれば風逸す、其能く命じて正鵠に中たり、銜轡を按せんと欲するも、豈に之れを得べけんや、今の君長たるもの、此れに類するもの多し、世射御の以て學ばざるべからざるを知りて、己れを修め、人を治むるの以て學ばざるべからざるを知らず、亦惑へるの甚だしきものなり、

三十二

松崎觀海黄亂の時、近隣出火す、怖れて逃げんといふ、父の白圭曰く、吾れ幼にして亦逃げんといふ、一老人あり、謂ふ、丈夫の語、當に火を避くるといふべし、當に火を逃がるといふべからずと、吾れ容を改めて之れを謝し、爾後逃亡を言はず、母の富永氏亦曰く、男兒一話一言を出だすも、當に婦女子の如くなるべからず、

三十三

孔生駒曰く、聖賢心を師として跡を師とせず、百世と雖も、道同じ、鄉原は跡を師として心を師とせず、書同じと雖も、術異なり、

三十四

服部蘇門曰く、天の我れを遇する厚しといふべし、夫れ天我れに約するに窮を以てし、能く嗜欲に澹ならしむ、我れを佚するに疾を以てし、肯て世故に閑ならしむ、我れを縱つに識を以てし、眼をして宇宙に空せしむ、我れを恣にするに膽を以てし、放言して自ら快うせしむ、是れ亦

足れり、優游自在、聊以て歳を卒ふ、唯、天我れを驕らすに才を以てせず、是れ恨むべきのみ、然れども亦此れに因りて人の役たることを免れしむ、則ち其意固に厚し、又何ぞ恨みん、

三十五

狩谷掖齋毎に生徒を誡めて曰く、學業は青年にあり、譬へば春に耕すが如し、之れを務めざれば何ぞ秋穫を得ん、

三十六

河野恕齋曰く、君子の學をなすや苟も之れを事業に措くこと能はざれば全德にあらず、

三十七

佐藤一齋曰く、春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む、

三十八

又曰く、我れ自ら感じて後、人之れを感ず、

三十九

又曰く、人生まれて、二十より三十に至るまで、方に出づる日の如し、四十より六十に至るまで、日中の日の如し、盛德大業、此時候にあり、七十八十は則ち衰頽蹉跎、將に落ちんとする日の如く、能く爲すなきのみ、少壯なるもの、宜しく時に及んで勉強し、以て大業を成すべし、遲暮の歎あることなければ可なり、

四十

佐久間象山曰く、日晷一たび移れば、千歳再來の今なし、形神既に離るれば、萬古再生の我なし、學藝事業、豈に悠々なるべけん、

四十一

赤松滄洲曰く、大丈夫生れて時に遇はざれば、當に宇宙を凌厲し、人世を睥睨し、飄然として塵表に輕擧す、焉んぞ能く局促して、人に仰食し、任を世に求むることをせんや、

四十二

物徂徠曰く、不仁を惡むの甚しきは、仁を好むの至らざるなり、

四十三

薮孤山曰く、己れに誠ありて、人能く之れを信ず、苟も人の信を欲して、誠を己れに立てず、豈に能く人を動かすものならんや、

四十四

太田錦城曰く、天命常なし、唯、德あるもの之れを得而して德なきもの、之れを喪ふ、則ち要は其德いかんを論ずべきのみ、

四十五

伊藤仁齋曰く、書を讀むは、當に沙を淘して金を拾ふが若くすべし、取ることは、其廣きを欲し、擇ぶことは、其精はしきを欲す、

四十六

又曰く、其道愈大なれば、之れを譏るもの愈衆く、其德愈邵ければ、之れに寇するもの愈深く、憂ふる心悄々として群小に慍らる、孔子だも猶ほ然り、況んや其他をや、

四十七

又曰く、己れを責めて人を責めざれば、怨なし、此れ學問究竟の法、

四十八

室鳩巣曰く、たゞ誠あれば感じ、感ずれば應ず、誠なければ感ぜず、感ぜねば應せず、應ずれば忽ちあり、應ぜねばおのづからなし、これ天地の妙用にあらずや、

四十九

又曰く、君子は常に内に心を用ひつゝ、たゞ手前を正しくして、外を飾ることなし、譬へば錦を衣てうはおほひするが如し、其美おほへどもおほふべからず、いやましにしるきぞかし、小人は内行おさまらずして、外見をのみ飾れば、くさきものに蓋するが如し、其臭ふさげども、ふさぐべからず、いとゝあらはるゝぞかし、

五十

雨森芳洲曰く、思慮人より高きこと一等なれば、便ち一等の人なり、等して之れを上げ、聖人に至りては、人より高きこと、幾何なるを知らず、萬世の教主たる所以なり、

五十一

尾藤二洲曰く、之れを知ること一日なれば、一日猶ほ百年のごとし、無知の百年、之れを醉生夢死といふ、長きも亦何ぞ益せん、朝に聞いて夕に死するも、亦可ならずや、

五十二

又曰く、學を力め、行を勉め、卑きよりして高く、近きよりして遠く、銖々之れを積み、寸々之れを進む、一時の間斷なく、一事の放過なく、斃死に至りて後止む、聖學の方、唯此れのみ、

五十三

藪孤山曰く、夫れ古人の能く古人に及ぶ所以のもの、其能く古人に及ばざるを疑ふを以てなり、其能く古人に及ぶ所以を求む、其能く古人に及ぶ所以を求む、此れ其終に能く古人に及ぶ所以なり、今人の古人に及ばざる所以のもの、其古人に及ばざるを疑はざるを以てなり、古人に及ばざるを疑はず、故に古人に及ぶ所以を求めず、古人に及ぶ所以を求めず、此れ其終に古人に及ぶ能はざる所以なり、

五十四

江村專齋曰く、名利は兩ながら好むべからず、名を好むもの、之れを利を好むものに比すれば差勝れり、名を好めば爲さゞる所あり、利を好めば爲さゞる所なきなり、

五十五

大鹽中齋曰く、書を讀まば則ち心得躬行を貴ぶ、

五十六

又曰く、書は固より道に入るの具なり、然れども要を知らずして泛觀博覽せば則ち德壞れて惡殖ゆ、吁亦己れを敗り世を亂る、愼まざるべけんや、

五十七

又曰く、若し私情に從ひ我意に任せ以て言動せば則ち胸萬卷に富むと雖も要するに書庫のみ、貴ぶに足らざるなり、

五十八

西郷南洲曰く、人を相手にせず天を相手にせよ、天を相手にして己れを

盡くし、人をも咎めず、我誠の足らざるを尋ぬべし、

五十九

又曰く、過を改むるに、自ら過ちたとさへ思ひ付かば、夫れにて善し、其事をば棄てゝ顧みず、直に一歩踏み出だすべし、過を悔やしく思ひ、取り繕はんとて、心配するは、譬へば、茶碗を割り、其缺を集め合せ見るも同じ、以て詮もなきことなり、

六十

池田草庵曰く、學者其身を奉ず、當に金玉の如くなるべし、微に闕失あらば、以て天下の至寶となすに足らず、

六十一

二宮尊德曰く、大事をなさんと欲せば、小さなる事を怠らず勤むべし、小積りて大となればなり、凡そ小人の常、大なる事を欲して小さなる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を勤めず、夫故終に大なる事をなすこと能はず、夫れ大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり、譬へば百萬石の米も、粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其業は一鍬づゝの功にあり、千里の道も、一歩づゝ歩みて至る、山を作るも、一簣の土よりなる事を、明かに辨へて、勵精小なる事を勤めば、大なる事必ずなるべし、小さなる事を忽にする者、大なる事は必ず出來ぬものなり、

六十二

安東省菴曰く、默は言はざるにあらず、言必ず則あり、言妄に發せざるを默とする所以なり、人を失ひ、言を失ふは、不智惟れ夠し、其言を失はん

よりは、寧ろ人を失ふに失せよ、若し言行を顧みば、豈に容易に談ぜんや、口を放まいにして大言するは、君子の慙づる所なり、

六十三

中江岷山曰く、凡そ事專ら理によりて斷決するときは、殘忍刻薄の心勝ちて、寛裕仁厚の心少なし、上の德旣に菲薄にして、下必ず損傷多く、人も心服せず、須らく長者の氣象ありて方に可なるべし、

六十四

木村蓬萊曰く、白鷗水にありて悠然として浮び、清閑自得し、而して其足躁擾少しも息ふることを得ず、是を以て其性を失はず、人の世に處するも、亦此の若きのみ、

六十五

並河天民曰く、世事多しと雖も、盡く是れ人道、人道勤めずして、更に何をかせん、學問の道、讀書の上にあらずして、實行の上にあり、

六十六

又曰く、後儒私欲なきの仁たることを知りて、民を濟ひ物を利するの仁たるとを知らず、其學枯寂を樂むの弊なり、

六十七

又曰く、記誦文辭の學の如き、一字の穩ならざる、一物の知らざるを恥づる者は、恥、其恥にあらずして、恥の心亡ぶ、所謂、斐孽宗を奪ひ、賊を認めて子とするの弊なり、

六十八

吉田松陰曰く、國躰と云ふは、神州は神州の躰あり、異國は異國の躰あり、

異國の書を讀めば、兎角異國の事のみを善と思ひ、我國をば却て賤みて異國を羨む樣に成行くこと、學者の通患にて、是れ神州の躰は異國の躰と異なる譯を知らぬ故なり、

六十九

陶山庄右衛門は對馬の人なり、郡の奉行となり、政、異蹟あり、常に人に謂つて曰く、人の己れを譽むるを聞いては、益なし、人の己れを謗るを聞いては益あり、

七十

雨森芳洲曰く、德を尙ぶものは君子の歸なり、才を尙ぶものは小人の漸なり、

七十一

又曰く、所謂聖人は即ち英雄の極なり、

七十二

又曰く、明察なるものは僞に流れ、質朴なるものは闇に流る、

七十三

安井息軒曰く、物の天地間に生ずる、唯人を貴しとなす、而して我れ人たるを得、人男を以て貴しとなす、而して我れ男たるを得、男士を以て貴しとなす、而して我れ士たるを得、天の我れに與ふる厚し、而して君父我れに資し、我れをして至大至高の道を學ばしむ、則ち又士中の最も厚きものなり、而して終に自ら異を世に標することを能はず、蠢々乎として走尸行肉の中に遊嬉し、以て計を得たりとなす、武の揮に栖むと何ぞ擇ばん、

七十四

中村敬宇曰く、人苟も一片の誠、胸中に存するあらば、甚だ微にして見るべからざるが若しと雖も、實に萬事の根源たり、以て藝事を修むべく、以て學識を植つべく、以て民人を治むべく、以て神明に交はるべし、

七十五

山鹿素行曰く、凡そ人の今日爲す所の言行、悉く後の教戒たれば、假令ひ命終に臨むの時といふと雖も、別に何事をか云ひ置き、何事を戒とすべしや、云云、平生の云ふ所行ふ所爲す所に戒むる所、是れ各、遺命なり、遺言なり、

七十六

新井白石曰く、大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して當に閻羅となるべし、

七十七

池夫雅曰く、貧は天のみ、恥を知らざるは人にあらざるなり、

七十八

安東省菴曰く、毀譽は君子と雖も、喜怒の心なきこと能はず、蓋し自ら知ること審なれば、之れが爲めに動かされざるなり、我れ善あれば、人の譽むるは理なり、當に自ら疆めて善を修めて可なるべきなり、我れ善なければ人の譽むるは愚なり、只虛名の笑を取らんことを恐るゝなり、何の喜びか之れあらん、我れ不善あれば、人の毀るは理なり、當に自ら勵んで惡を去りて可なるべきなり、我れ不善なければ、人の毀るは狂なり、只實惡の禍を招かんことを恐る、何の怒ることか之れあらん、毀

譽は人にあるものなり、喜ばず怒らざるは、我れにあるものなり、只當に我れにあるものを求めて、人にあるものを求むべからざるべきなり、

七十九

貝原益軒曰く、危に臨んで懼れず、義に當りて其身を愛せず、是れ君子變に處するの道、此の如くせざるべからず、須らく此に於て能く勇猛果敢にして奮發すべし、若し恐怖して苟も免るれば、平日小廉曲謹ありと雖も、觀るに足らざるのみ、蓋し大節に臨んで奪ふべからざれば、君子人となすべきなり、

第二　支那の部

一

禮記の學記に云く、玉琢かざれば器とならず、人學ばざれば道を知らず、

二

易の繫辭に云く、君子は其室に居て其言を出だす、善なるときは、千里の外之れに應ず、況や其邇きものをや、其室に居て其言を出だす、善ならざれば、千里の外之れに違ふ、況や其邇きものをや、言身に出でゝ民に加ふ、行邇きに發して遠きに見はる、言行は君子の樞機なり、樞機の發は榮辱の主なり、言行は君子の天地を動かす所以なりんや、

三

又云く、善積まざれば、以て名を成すに足らず、惡積まざれば、以て身を滅

ぼすに足らず、小人は小善を以て益なしとなして為さざるなり、小惡を以て傷なしとなして去らざるなり、故に惡積んで掩ふべからず、罪大にして解くべからず、

四　書の大禹謨に曰く、罪の疑はしきは、惟れ輕んじ、功の疑はしきは、惟れ重んず、

五　又曰く、滿は損を招き、謙は益を受く、時れ乃ち天の道なり、

六　老子曰く、天道は親なく、常に善人に與みす、

七　孔子曰く、君子は人の美を成し、人の惡を成さず、小人は是れに反す、

八　又曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すことあり、

九　孟子曰く、富貴も淫することと能はず、貧賤も移すことと能はず、威武も屈することと能はず、此れ之れを大丈夫といふ、

十　荀子曰く、積土山を成せば、風興り、積水淵を成せば、蛟龍生ず、積善德を成して神明自ら得られ、聖心備はる、

又曰く、道、邇しと雖も、行かざれば至らず、事、小なりと雖も、爲さざれば成らず、

十二

墨子曰く、源濁るものは、流、清からず、行、信ならざるものは、名必ず耗す、

十三

管子曰く、之れを思ひ、之れを思ふて得ざれば、鬼神之れを教ふ、鬼神の力にあらざるなり、其精氣の極なり、

十四

又曰く、倉廩實れば禮節を知り、衣食足れば榮辱を知る、

十五

董仲舒曰く、其義を正うして其利を謀らず、其道を明かにして其功を謀らず、

十六

韓昌黎曰く、吾が前に生れて其道を聞くや、固に吾れより先なれば、吾れ從つて之れを師とす、吾が後に生れて其道を聞くこと、亦吾れより先なれば、吾れ從つて之れを師とす、吾れ道を師とするなり、夫れ庸ぞ其年の吾れより先後して生れたることを知らんや、是故に貴となく賤となく長となく少となく、道の存する所は、師の存する所なり、

十七

周子曰く、實勝つは善なり、名勝つは恥なり、故に君子は德に進み、業を修め、孳々として息まず、實勝たんことを務めてなり、德業未だ著はれざるあるときは、恐々然として人の知らんことを畏る、恥に遠ざかるな

り、小人は僞れるのみ、故に君子は日に休し、小人は日に憂ふ、

十八　程明道曰く、見る所期する所は、遠くして且つ大ならずんばあるべからず、然れども之れを行ふことは、亦須らく力を量りて漸あるべし、志大にして心勞し、力小にして任重くば、恐くは終に事を敗らん、

十九　程伊川曰く、人を動かすことは能はざるは、只是れ誠、至らざればなり、事に於て厭倦するは、皆是れ誠なき處なり、

二十　又曰く、言語を愼んで以て其德を養ひ、飲食を節にして以て其體を養ふ、事の至近にして繫る所の至大なるもの、言語飲食に過ぎたるはなきなり、

廿一　朱子曰く、聖賢の千言萬語、只人其本心を失はざるを要す、

廿二　又曰く、但、其良心發見の微に因りて、猛省提撕して、心をして昧からざらしむ、則ち是れ工夫をなす底の本領なり、本領既に立てば、自然に下學して上達す、若し良心發見の處を察せざれば、即ち渺々茫々として恐くば手を下だす處なけん、

廿三　又曰く、所謂涵養の工夫は、亦是れ眉を閉ぢ眼を合し、土偶人の如くにして、然して後之れを涵養といふにあらざるなり、只事に應じ物にすなり、

る處に此心を失はず、各其理を得るを要するのみ、

廿四

王陽明曰く、知は是れ行的の主意、行は是れ知的の功夫、知は是れ行の始、行は是れ知の成るなり、

廿五

又曰く、學をなすの大病は名を好むにあり、

廿六

又曰く、名と實と對す、實を務むるの心、重きこと一分なれば、名を務むるの心輕きこと一分、全く是れ實を務むるの心なれば、即ち全く名を務むるの心なし、

廿七

又曰く、人の胸中、各箇の聖人あり、只自ら信じ及ばず、都て自ら埋倒し了はる、

廿八

呂新吾曰く、道は己れを損ずるより要なるはなし、學は偏を矯むるより急なるはなし、

廿九

又曰く、我れを毀るの言、聞くべし、我れを毀るの人は、必ずしも問はざるなり、我れをして此事あらしむるや、彼れ言はずと雖も、必ず之れを言ふものあらん、我れ聞いて之れを改む、是れ又一の業を受けざるの師を得るなり、我れをして此事なからしめんか、我れ辨ぜずと雖も、必ず之れを辨ずるものあらん、若し聞いて之れを怒らば、是れ又一の言を

受けざるの過を多くするなり、

三十

又曰く、多少の英雄豪傑善をなすに興るべくして、卒に成すなきは、只此身を習俗中より拔き出ださゞるが爲めなり、若し群謗を恤へず、斷じて以て必ず行ひ古人を以て契友となし、天地を以て知己となさば、他の千誣萬毀に任ずるも、何ぞ妨げん、

卅一

又曰く、世間の至貴、人品に如くはなし、天地と參し、古人と友たり、帝王且つ之れが爲めに屈し、天下其守を易らず、而るに乃ち聲色財貨、富貴利達を以て輕々に箇の人品を將ちて賣り了はる、此れを自ら賤うすといふ、商賈奇貨を得るも、亦須らく價を待つべし、況や士君子の身をや、

卅二

李二曲曰く、形骸少あり壯あり、老あり死あり、而して此一點の靈原、少なく、壯なく、老なく、死なし、天地に塞がり、古今を貫き、須臾の息むあるなし、會得する時、天地我れより立て、萬化我れより出づ、千聖皆肩を比し、古今一旦暮、

卅三

張子曰く、天地の爲めに心を立て、生民の爲めに道を立て、去聖の爲めに絶學を繼き、萬世の爲めに太平を開く、

卅四

李謙曰く、陰德は耳の鳴るが如く、己れ之れを知る、

卅五

古人曰く、善をなすは易く、善をなすの名を避くるは難し、

卅六

遜志齋曰く、學は疑にあらざれば明かならず、而して疑は鑿を惡む、疑ふて能く辨ず、斯れを善學となす、古を以て皆然りとすること勿れ、

卅七

列女傳に云く、德は不祥に勝ち、仁は百禍を除く、

卅八

謝枋得が詩に云く、人生芳穢有千歲、世上榮枯無百年、

卅九

程伊川曰く、大率言語須らく是れ含蓄して餘意あるべし、

四十

薛敬軒曰く、欲淡なれば心清し、心清ければ理見はる、

四十一

又曰く、人己れを譽むる、果して善あらば、但當に其善を持すべし、自ら喜ぶの心あるべからず、善なくんば、增脩する可なり、人己れを毀る、果して惡あらば、即ち當に其惡を去るべし、聞くを惡むの意あるべからず、惡なくんば、勉めを加ふる可なり、

四十二

又曰く、人の千病萬病ある所以は、只己れを有するが爲めなり、己れを有するが爲めの故に、萬端を計較す、惟己れ富まんを欲し、惟己れ貴からんを欲し、惟己れ安からんを欲し、惟己れ樂まんを欲し、惟己れ生きんを欲し、惟己れ壽からんを欲し、而して人の貧賤、危苦死亡、一切恤へず、

是れに出りて生意屬せず、天理滅絶す、人の形ありといふと雖も、其實禽獸と異を以て異ならん、若し能く己れを有するの病に克ち去り、廓然太公、富貴貧賤、安樂生壽、皆人と之れを共にすれば、生意貫徹、彼此各〻分願を得て、天理の盛なる、得て勝げて用ふべからざるものあり、

四十三

書の仲虺之誥に云く、問ふことを好めば裕に自ら用ふれば小なり、

四十四

欒武子曰く、民生は勤にあり、勤むれば匱からず、

四十五

韓昌黎曰く、當世を化するは言に如くはなし、來世を化するは書に如くはなし、

四十六

許白雲曰く、吾れ大に人に過ぎたることあるにあらず、唯學をなすの功、間斷なきのみ、

四十七

歐陽修曰く、其好む所を視て以て其人を知るべし、

四十八

邵子曰く、人の心は即ち天地の神、人の自ら欺くは、天地を欺く所以なり、慎まざるべけんや、

四十九

書の君陳に云く、必ず忍ぶことあれば、其れ乃ち濟すことあり、容るゝことあれば、德乃ち大なり、

五十

草木子に云く、其實を豐にするものは、其花を嗇む、

五十一

方孝孺曰く、樂未だ既きずして、憂之れに繼ぐものは、人の欲なり、

五十二

蔣子方曰く、學ぶものは牛毛の如く、成るものは麟角の如し、

五十三

古人曰く、成名毎在窮苦日、敗事多因得志時、

五十四

薛敬軒曰く、汲々として自ら脩むるも、及ばず、何ぞ人を責むるに暇あらん、自ら脩めずして人を責むるは、其田を舍てゝ人の田を耘るなり、

五十五

張子曰く、學は人を責めざるに至りて其學進む、

五十六

許魯齋曰く、己れを責むるものは、以て人の善をなすべし、人を責むるものは、適以て己れが惡を長ず、

五十七

吳康齋曰く、凡そ事須らく斷ずるに義を以てすべし、利害を計較せば、便ち非なり、

五十八

又曰く、苟も一毫だも其道を盡くさゞれば、即ち是れ自ら天に絕つ、

五十九

朱子曰く、陽氣發する處、金石亦透る、精神一透、何事か成らざらん、

六十

鄒南皐曰く、丈夫世間に生まれ、耳目口鼻の形を具ふ、物に異なる所以のもの、此學あるを以てのみ、學志を立つるより先なるはなし、千古の聖人、俱に是れ一箇の肉身漢子、只是れ肯て凡夫とならざるを志し、單刀匹馬、向ふ所前なければ何の聖域か臻り難からん、唐人の詩に云く、語不驚人死不休と、吾れ以爲く、聖に至らざれば、死すとも休まずと、

六十一

李延平曰く、凡そ危きを蹈むもの、慮深らして全きを獲、安きに居るもの、患忽にする所に生ず、此れ人の常情なり、

六十二

呂東萊曰く、欲多きものは人を畏るる亦多し、欲少きものは、人を畏るゝ亦少し、欲せざる所なきものは、畏れざる所なし、欲する所なきものは、畏るゝ所なし、

六十三

范忠宣、子を戒めて曰く、人、至愚と雖も人を責むるは明かなり、聰明あると雖も、己れを恕するは昏し、爾曹但、當に人を責むるの心を以て己れを責め、己れを恕するの心、人を恕すべし、聖賢の地位に到らざるを患へざるなり、

六十四

尹和靖曰く、莫大の禍は須臾の忍びざるに起る、謹まざるべからず、

六十五

高景逸曰く、丈夫世に處すれば、則ち甚だ壽考なるも、百年に過ぎず、百年中老穉の日を除けば、世に見はるゝもの三十年に過ぎず、此三十年、其人をして泰華より重からしむべく、其人をして鴻毛より輕からしむべし、是を以て君子は之れを愼む、

六十六

又曰く、人生安ぞ事々意の如くなるを得ん、唯意の如くならざる事來たるも、累はす所とならず、其權我れにあり、事々意の如くなるべきなり、

六十七

呂叔簡曰く、聖賢の量空濶、事胸中に至れば、一葉の滄海に泛ぶが如し、

六十八

又曰く、世間一處として拂意の事なきはなし、一日として拂意の事なきはなし、惟度量寛弘なれば、受用の處あり、彼の局量褊淺なるもの、空しく自ら懊恨するのみ、

六十九

胡敬齋曰く、事に處するの法、己れを正うするを先きとなし、理に順ふて以て之れを行ふ、人の從違必とすべからざるなり、時好に趨るべからず、然れども理に順ふ處、天且つ違はず、況や人に於てをや、故に行得ざるあれば、皆これを己れに反求す、

七十

陸象山曰く、自立自重、人の脚跟に隨つて人の言語を學ぶべからず、

七十一

薛敬軒曰く、鳳凰千仞に翔るの氣象あれば、即ち區々たる聲利の爲めに

動かされず、

七十二

陳白沙曰く、名節は道の藩籬、藩籬守らざれば、其中未だ能く獨り存するものあらざるなり、

七十三

陳幾亭曰く、名利の人を壞る、三尺の童子も皆之れを知る、但利を好むの弊、人をして復た名を顧みざらしむ、而して名を好むの過、又人をして復た君父を顧みざらしむ、世親命を妨げて以て身を潔うし、朝廷を訕りて以て直きを賣るものあり、是れをも忍ぶべくんば、孰れをか忍べからざらん、

七十四

史搢臣曰く、有餘を待ちて、而して後、人を濟はゞ、必ず人を濟ふの日なけん、有餘を待ちて、而して後、書を讀まば、必ず書を讀むの時なけん、

七十五

又曰く、姦を鋤し惡を杜ぎ、他の一條の去路を放つを要す、若し之れをして一も容るゝ所なからしめば、譬へば川を防ぐものゝ如し、若し盡く其流を絶たば、堤岸必ず潰えん、

七十六

邵康節安分吟に云く、心安身自安、身安室自寬、心與身俱安、何事能相干、誰謂一身小、其安若泰山、唯謂一室小、寬如天地間、安分身無辱、知幾心自閒、雖居人世上、却是出人間、

七十七

戚南塘曰く、爾の過を攻むるものは、爾の師なり、下に屬する人能く爾の過を陳ぶ、即ち之れを師とするに禮を以てする能はず、然れども必ず之れを師とするに心を以てす、

七十八

林君復曰く、善をなすは、重きを負ふて山に登るが如し、志已に確なりと雖も、而も力尚ほ及ばざるを恐る、惡をなすは、駿に乘りて坂を走るが如し、鞭策を加へずと雖も、而も足亦制する能はず、

七十九

洪自誠曰く、天地萬古あり、此身再び得られず、人生只百年、此日最も過ぎ易し、幸に其間に生ずるもの、有生の樂を知らざるべからず、亦虛生の憂を懷かざるべからず、

智巧亦不可知、械機何必斥之。

八十

又曰く、勢利粉華、近づけざるものを潔しとなす、之れを近づけて染まざるものを尤も潔しとなす、智械機功知らざるものを高しとなす、之れを知りて用ひざるものを尤も高しとなす、

八十一

蔡虛齋曰く、善く其身を愛するものは、能く一生を以て萬載の業となす、云云、自愛を知らざるものは、其聰明を以てして盛時に際し、名器を操りて、徒に以て其一己の私に就くのみ、所謂寶山に入りて手を空うして回るが如きものなり、

八十二

陸象山曰く、俗見に溺るれば、則ち正言を聽くも入らず、

八十三

胡五峯曰く、一身の利は謀るなきなり、而して天下を利するものは、則ち之れを謀る、一時の利は則ち謀るなきなり、而して萬世を利するものは、則ち之れを謀る、

八十四

范魯公從子果を曉して曰く、物盛則必衰、有隆還有替、速成不堅牢、亟走多顛躓、灼々園中花、早發還凡萎、遲々澗畔松、鬱々含晩翠、賦命有疾徐、青雲難力致云云、

八十五

高深甫曰く、惡人の賢を害するは、猶ほ天を仰いで唾を吐くがごとし、唾、天に至らず、還りて自身に墮つ、

八十六

又曰く、天を怨みず、人を尤めず、行得ざるあればこれを己れに反求す、心境何等の平靜ぞ、

八十七

張子韶曰く、明を內に用ふるものは、己れの過を見、明を外に用ふるものは、人の過を見る、己れの過を見るものは、天下皆己れに勝るを視るなり、人の過を見るものは、天下皆己れに如かざるを視るなり、此れ智愚の分るゝ所以か、

八十八

王陽明曰く、山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し、

八十九

又曰く、人を殺す、須らく咽喉上に就いて刀を着くべし、吾人の學をなす、當に心髓微に入る處より力を用ふべし、自然篤實光輝、私欲の萌と雖も、眞に是れ洪爐の點雪、天下の大本立つ、

九十

游定夫曰く、人の覩ざる所、隱れたりといふべし、而して心獨り之れを見る、亦見はれずや、人の聞かざる所、微なりといふべし、而して心獨り之れを聞く、亦顯ならずや、隱れたるより見はれたるはなく、微なるより顯なるはなきを知りて、而して獨りを愼むこと能はざるは、是れ自ら欺くなり、其道を離るゝこと遠し、

第三　印度の部

一　金剛經に云く、凡そあらゆる相は、皆是れ虛妄なり、若し諸相は相にあらずと見ば、即ち如來を見ん、

（相者即今所謂現象也）

二　又云く、過去の心も不可得なり、現在の心も不可得なり、未來の心も不可得なり、

三　又云く、信心清淨ならば、則ち實相を生ぜん、

四　又云く、一切の相を離るゝを、即ち諸佛と名づく、

（佛之本体超然于現象以外）

五

又曰く、若し色を以て我れを見、音聲を以て我れを求めば、是人、邪道を行するなり、如來を見ること能はず、

六

梵網經に云く、自ら知る、我れは是れ未成の佛、諸佛は是れ已成の佛なるを、

七

又云く、菩薩は應に一切の衆生に代はりて毀辱を加ふるを受け、惡事をば、自ら己れに向へ、好事をば他人に與ふべし、

八

又云く、法の爲めに身を滅すとも、法を請すべし、

九

法華經に云く、佛の成就する所は、第一希有難解の法なり、唯、佛と佛との、乃ち能く諸法實相を究盡せり、

十

又云く、如來は但、一佛乘を以ての故に、衆生の爲めに法を說く、餘乘若くは二、若くは三あることなし、

十一

又云く、諸佛の語、異なることなし、唯、一にして二乘なし、

十二

圓覺經に云く、諸障若し消滅せば、佛境便ち現前すべし、

十三

又云く、一切衆生の種々の幻化は皆如來圓覺妙心より生ず、獨ほ空華の

空に從つてあるが如し、幻華は滅ずと雖も、空性は壞せず、衆生の幻心も還つて幻によつて滅す、諸幻盡く滅すれども覺心は動かず、

十四

無量壽經に云く、善人は善を行ふて、樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行ふて、苦より苦に入り、冥より冥に入る、

十五

又云く、如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の測る所にあらず、唯佛のみ獨り明了なり、

十六

又云く、人、世間愛欲の中にありて、獨り生じ獨り死し、獨り去り獨り來たる、行をおふて苦樂の地に至り趣く、身自ら之れをうく、代はるものあるなし、

十七

觀無量壽經に云く、諸佛如來は是れ法界身なり、一切衆生の心想の中に入る、是故に汝等心に佛を想ふ時、是心即ち是れ三十二相、八十隨形好なり、是心、佛を作る、是心、是れ佛なり、諸佛の正徧知海は心想より生ず、

十八

又云く、佛心は大慈悲是れなり、

十九

法華經に云く、一切の衆生は皆是れ吾子なり、深く世樂に着して慧心あることなし、三界は安きことなし、猶ほ火宅の如し、衆苦充滿して、甚だ怖畏すべし、常に生老病死憂患あり、是等の如き火、熾然として息まず、

如來は已に三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安處せり、今此三界は、皆是れ我有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なり、而して今此處諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護をなす、

二十

又云く、汝諸人等は皆是れ吾子なり、我れは則ち是れ父なり、汝等累劫に衆苦に燒かる、我れ皆濟拔して三界を出でしむ、

廿一

又云く、諸苦の所因は貪欲を本となす、

廿二

又云く、佛は値ふことを得がたし、優曇鉢羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値へるが如し、

廿三

又云く、善知識は是れ因緣なり、

廿四

金剛經に云く、一切有爲の法は夢幻泡影の如く、露の如く、又電の如し、

廿五

維摩經に云く、若し菩薩淨土を得んと欲せば、當に其心を淨ふすべし、其心の淨きに隨つて則ち佛土淨し、

廿六

又云く、諸法究竟して所有なし、是れ空の義なり、我と不我とに於て不二なる、是れ無我の義なり、法本と然えず、今は則ち無滅、是れ寂滅の義、

廿七

又云く、妄想は是れ垢なり、妄想なきは是れ淨なり、顚倒は是れ垢なり、顚倒なきは是れ淨なり、我を取らざるは是れ淨なり、

廿八

又云く、四大合するが故に、假りに名づけて身となす、四大主なければ、身も亦我なし、

廿九

又云く、解脫あり、不可思議と名づく、若し菩薩、是解脫に住するものは、須彌の高廣なるを以て芥子の中に入るゝも、增減する所なし、

三十

勝鬘經に云く、涅槃界は即ち是れ如來の法身、究竟法身を得れば、則ち究竟一乘、異の如來なく、異の法身なし、如來即ち是れ法身、究竟法身を得るもの、則ち究竟一乘、究竟は即ち是れ無邊不斷なり、

卅一

楞伽經に云く、猶ほ猛風の大海水を吹くが如く、外境界の風、心海を飄蕩して、識浪不斷なり、

卅二

仁王經に云く、諸の法性、即ち眞實なるを以ての故に、來なく去なく生なく滅なく、眞際に同じく法性に等しく、二なく別なし、猶ほ虛空の如し、

卅三

又云く、一切の法は皆如なり、諸佛法僧も亦如なり、

卅四

又云く、三界の無明を斷じ盡くすものを、即ち名づけて佛となす、

如者世界之本也與二今所レ謂實在一同。

卅五

又云く、自他を化利して、悉く平等なり、是れを菩薩の初發心と名づく、

卅六

無量義經に云く、無量義とは、一法より生ず、其一法とは、即ち無相なり、是の如きの無相は相なく相ならず、相ならず相なきを、名づて實相となす、菩薩摩訶薩是の如き眞實の相に安住し已んで發する所の慈悲、明諦にして虛ならず、衆生の所に於て眞に能く苦を拔く、苦已に拔き已んで復た爲めに法を說いて諸の衆生をして快樂を受けしむ、

卅七

又云く、唯佛と佛とのみ乃ち能く究了す、

卅八

涅槃經に云く、我とは即ち是れ佛の義、常とは是れ法身の義、樂とは是れ涅槃の義、淨とは是れ法の義、

卅九

又云く、明、滅盡すと雖も、燈器猶ほ存す、如來も亦然り、煩惱滅すと雖も、法身常に存す、

四十

又云く、我れ衆生に於て實に子想をなすこと、羅睺羅の如し、

四十一

又云く、佛は是れ常住なり、

四十二

又云く、愚人は解せず、之れを祕藏といふ、智者了達すれば、藏と名づけず、

四十三

又云く、畢竟樂は即ち是れ涅槃なり、

四十四

又云く、眞解脫は即ち是れ如來なり、如來は即ち是れ涅槃なり、涅槃は即ち是れ無盡なり、無盡は即ち是れ佛性なり、

四十五

又云く、大般涅槃とは解脫處と名づく、

四十六

楞嚴經に云く、理は則ち頓に悟る、悟に乘じて併せて消す、事は頓に除くにあらず、次第に因りて盡くす、

四十七

心地觀經に云く、三界の中、心を以て主となす、能く心を觀するものは、究竟して解脫す、觀することと能はざるものは、究竟して沈淪す、衆生の心は、猶ほ大地の如し、五穀五果、大地より生ず、是の如きの心法、世出世善惡五趣、有學無學、獨覺菩薩、及び如來を生ず、

四十八

又云く、世間の恩に其四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩、是の如きの四恩は、一切衆生、平等に荷負せり、

四十九

楞嚴經に云く、汝等當に知るべし、一切衆生無始よりこのかた生死相續することと、皆常住の眞心、性淨明の躰を知らずして、もろ〳〵の妄想を

用ふるに由る、此想眞ならず、故に輪轉あり、

五十

又云く、必ず內を知らざれば、いかんが外を知らん、

五十一

又云く、根塵源を同うし、縛脫無二なり、識性の虛妄なること、猶は空華の如し、

五十二

又云く、迷晦すれば即ち無明なり、發明すれば便ち解脫なり、

五十三

又云く、當に婬慾を觀ずること、猶ほ毒蛇の如くし、怨賊を見るが如くすべし、

五十四

又云く、心中明かならざれば、賊を認めて子とせん、

五十五

普賢觀經に云く、汝今應に大乘の因を觀ずべし、大乘の因とは、諸法實相なり、

五十六

又云く、此舌根は惡業を動かす、

五十七

又云く、一切の業障海、皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲するものは、端坐して實相を念せよ、衆罪霜露の如く慧日能く消除す、

五十八

涅槃經に曰く、長壽を得んと欲せば、應に一切衆生を護念すること子想に同じかるべし、

五十九

又云く、涅槃義とは、即ち是れ諸佛の法性なり、

六十

又云く、諸佛の師とする所は、所謂法なり、法常なるを以ての故に、諸佛も亦常なり、

六十一

又云く、如來等しく一切衆生を視ること、猶ほ一子の如し、

六十二

又云く、眞解脫とは、即ち是れ如來なり、如來と解脫とは、二なく、別なし、

六十三

又云く、解脫は、即ち是れ如來、如來は、即ち是れ涅槃なり、

六十四

華嚴經に云く、未だ曾て佛に去來あるを見ず、

六十五

大乘起信論に云く、一切の邪執、皆我見による、若し我を離れば邪執なし

六十六

「ダムマパーダ」に云く、考察は不朽に達するの路にして、考察なきは死滅に達するの路なり、考察するものは死せず、考察せざるものは、已に死せると同じ、

六十七

「チャンドヂャ、ウパニシャド」に云く、人にして何等か認識する所あらば、必ず眞理を語る、認識せざる者は眞理を語らず、唯、認識する者のみ眞理を語る、是故に人は認識を認識することを希求せざるべからず、

人は思惟する時に認識す、思惟なければ、何等の認識もなし、認識は唯、思惟によりて來たる、是故に人は思惟を認識することを希求せざるべからず、

人は信念する時に思惟す、信念なければ、何等の思惟もなし、唯、信念を有する者のみ思惟を有す、是故に人は信念を認識することを希求せざるべからず、

第四　西洋の部（上）

一

ソクラーテス曾て節制を論じて曰く、人をして其心身を併せて俱に完全の狀態に達することを得せしむるもの、能く其家族を支配することを得せしむるもの、而して又其友人及び其國家に有用なることを得せしむるもの、而して又其敵に打勝つことを得せしむるもの、是れ亦此德に由るのみ、此の如くなれば啻に利益の爲めに甚だ愉快なるのみならず、又此れより生ずる所の滿足は甚だ願はしきものなり、

二

又淫行を論じて曰く、肉樂に沈溺せしむると同時に有益なる事をなすべき間暇を奪ふ、而して又其精神を執ふるの極、間〻至善なる道を知ることありと雖も、自ら至惡中に投じて賤視すべきものあるに至るな

り、

三

又曰く、謬見を固執するよりは、說を一變するを優れりとなす、

四

アンチステネス敝れたる衣服を着けて其貧を誇示せり、ソクラーテス之れを熟視して曰く、アンチステネスよ、我れ汝が衣服の穴より覗きて汝が虛誇心を見る、

五

ソクラーテス曰く、友情は生命に於ける最大福祉の一なり、一切所有物は之れを失ふことあるも、善良なる朋友は尙ほ存すべきものなればなり、

與魯論所謂知之爲知之不知也是知也而義同語異

六

プラトン盛宴を張りて友人を招く、デオゲネス招かれずして至り、美麗なる敷物を踏んで曰く、我れ此の如くにして、プラトンの傲慢心を蹂躙す、プラトン乃ち之れに答へて曰く、おーデオゲネスよ一層甚しき傲慢心を以て、

七

ソクラーテス或る人の無知を證明して後自ら己れに語りて曰く、余は此人より知者なり、我れも彼れも何等有益なる事を知るものにあらざるが如し、併し彼れは知らざるのに知れるものと想像せり、余は眞に知らざるが故に知れるものと思惟せず、是故に余は只此一瑣事に於て彼れより知者なるが如し、

八

アリストテレス曰く、眞理の敵はれんとするに當りて之れが爲めに己れが肉を殺ぎ血を濺ぐは、殊に吾人哲學者の本務なり、親友も眞理も共に之れを愛すと雖も、寧ろ眞理を重んずるを以て吾人の神聖なる本務となす、

九

又曰く、數多の朋友を有するものは、朋友を有せざるものなり、

十

又曰く、我れに一友あるは、二箇の身躰にして一箇の精神あるものなり

十一

或る人朋友に對して如何になすべきかを問ひしに、アリストテレス答へて曰く、彼等が我々に對してなすことを欲するが如くせよ、

十二

カント曰く、汝が意志の法則が何時も同時に一般立法の主義として價値ある如くに行動せよ、

十三

ルッソー曰く、人を鎔鑄陶冶せんと企圖する前に當りて之れを記憶せよ、自ら其人となり居ることを要す、自らに於て提出せんとする所の例を發見せざるべからず、

十四

パスカール曰く、外物の學は懊惱の時に當りて道德上の無識に就いて吾人を慰藉することを能はず、然れども道德の學は常に外物上の無識

に就いて吾人を慰藉するに足る、

十五

ヘーゲル曰く、精神に取りては、自然を考察することは、唯、方便のみ、思惟の訓練のみ、而して其目的は精神の解放に外ならざるなり、

十六

ショッペンハウエル曰く、禮讓と自尊とを合一するは、最上の技術なり、

十七

又曰く、眞に偉大なる精神は、鷲の如く、獨り高處に巣ふ、

十八

フェランド曰く迅速なる成熟は必ず又迅速なる破滅を來たすものなり、

范魯公曰、灼々園中花、早發還先凋、此詩意亦是

十九

又曰く、如何なる恐怖も死に對しての恐怖より人をして不幸ならしむるものはなし、

二十

又曰く、最大最強の人は、幼年の時辛苦を經たるものなり、

廿一

ギジチキー曰く、行爲が一たび成し遂げられたる以上は、最早吾人に屬せず、而して其結果は、波の如く次第に遠くに及び、永久に傳播するものなり、

廿二

ヂオルヂ、エリオット曰く、吾人の行迹は、吾人の生みたる兒子の如く、吾

人の意志いかんに拘はらず、生存し、且つ動作す、否、兒子は絞殺し得べきも、行迹は決して然らず、行迹は吾人意識の内外に於て不滅の生命を有するものなり、

廿三

シャフツボリー曰く、些少なりとも惡に傾向すれば、品性及び生命の價値を變更す、

廿四

スペンセル曰く、獨り天才が科學と結合したる場合に於てのみ最高の成果を生じ得べきなり、

廿五

エッヂウォルスは伴侶の感化の重大なるを自覺し、伴侶なきか、若くは善き伴侶あるか」を以て要訣とせり、

廿六

ロード、コリングウード曰く、卑劣なる仲間の中に居るよりは寧ろ單獨なるを善しとす、汝の仲間をして汝の如く、若くは汝より優等ならしめよ、何んとなれば、人間の價値は常に其仲間の價値によりて支配さるべければなり、此れを以て箴言とせよ、

廿七

ミルトン曰く、敬虔的に正義的に吾人自身を尊重することは一切稱揚すべき價値ある企業の發生する根本的濕潤及び源泉なりとするを得べし、

廿八

メタスタジオ曰く、一切人類に於けるものは、習慣なり、德其物と雖も亦然り、

廿九

アベルネシー曰く、若し其なさんと欲する所に就いて明晰なる觀念を有せば、之れを達するに適切なる方法を選出するに於て殆んど錯誤なかるべし、

三十

ジョン、ホンテル曰く、余の法則は事を始むるに當りて其果して成遂せられ得べきや否やを熟考するとなり、若し成遂し得られざれば、敢て之れを企圖せず、若し成遂し得らるれば、十分の勞力を之れに加ふるによりて之れを成遂し得べし、一たび始めたる以上は事の成遂せらるゝ迄は休止せず、一切余の成功は此法則によりて得られたるものなり、

卅一

ネルソン曰く、生涯に於ける一切余の成功は時機より常に十五分早かりしにあり、

卅二

ジョン、ステルリング曰く、克己を敎ふる最惡の敎育は、其他一切を敎ふるも、只克己を缺く所の最善の敎育に優れり、

卅三

ウェンデル、フィリップス曰く、世界に於ける最大の變化は、天才に由りて生ずるにあらずして、寧ろ品性の偉大なる勢力に由りて生ず、

卅四

ゲーテ曰く、逸居して勞動せざるものより憐むべきはなし、天與の至美なるものも、彼れに取りては、厭ふべきものたり、

卅五

ショッペンハウエル曰く、奮鬪せざれば勝利なし、

卅六

デューリング曰く、生命は統一を成せる狀態の繼續にして、何れの狀態も、後に至りて曾て定め置きたるものを實質的に充足するものなり、

卅七

トーマス、アケムピス曰く、吾人は間、其何をなし得るかを知らざることあるも、吾人の何たるかは實試によりて顯現せらるべし、

卅八

アリー、セッフェル曰く、人生に於ては、心身の勞働によるにあらざれば、何物も効果を生ずること能はず、努力して又努力すること、是れ即ち人生なり、

卅九

ロード、コリングウード曰く、記憶せよ、汝が二十五歲に達する迄に、終身汝の用をなすべき品性を確定せざるべからざることを、

四十

ソロモン曰く、智者と交はるものは智者となる、

四十一

ソル、ジョシュア、レイノールヅ曰く、繪畫若くは其他の技術に於て卓絕せ

んと決心せるものは、起きたる瞬間より寢牀に就くまで全く精神を其一事に凝らさゞるべからず、

四十二

又曰く、卓絶せんと決心せるものは、好惡に拘はらず、朝晝夜を論ぜず、其業を成さゞるべからず、是に於てか其業の一大難事にして決して遊戲にあらざるを知るべし、

四十三

ナポレオン曰く、眞智は即ち斷乎たる決定にあり、

四十四

又曰く、出來得べからずといふことは唯愚人の辭書に於てのみ發見すべき言葉なり、

四十五

ジョンソン曰く、世界に於ける一切の不平は不當なり、余は未だ曾て功績ある者の蔑如せられたるを見ず、成功すること能はざるものは、大抵其人の過失によることなり、

四十六

リチャード、セシル曰く、數多の事件をなすべき捷徑は、一時に唯一事件をのみなすにあり、

四十七

又曰く、方法は譬へば猶ほ物品を箱の内に詰め込むが如し、詰め込むことに巧なるものは、拙なるものより一倍多く詰め込み得るなり、

四十八

デウィットは一時に一事を以て格言として曰く、若し余が已むを得ざる急用を有する時は、之れを了はる迄一切他の事を思はず、若し又一家の私事にして余の注意を惹くことあらば、之れを整理する迄余は全力を之れに用ふ、

四十九

ソル、ウォルター、スコットは或る青年を戒めて曰く、何事によらず直に其當になすべき所のものをなせよ、休憩時間は事務後に於てすべし、決して事務前に於てすべからず、一箇の聯隊が前進するに當りて、前部が何等の障碍なく確實に行動するにあらざれば、後部は動もすれば輙ち混亂を免れず、今事務の如きも亦然り、其先づ手に觸るゝ所のものを直に確實に規則正しく成し遂ぐるにあらざれば、他の事件が背後に輻湊し、遂に一切の事件が一時に壓迫し來たり到底人間の頭腦を以てしては混亂を免れざるに至るものなり、

五十

ドライデン曰く、書は宇宙を讀むの眼鏡なり、

五十一

ジョンソン曰く、貧債を單に不便として考ふるが如き習慣を作る勿れ、貧債は災厄なるを發見すべし、貧乏は善をなすべき數多の手段を奪ひ、反りて自然的といはず道德的といはず、凡そ惡に對して抵抗すべき能力を弱くす、是を以て貧乏は一切强大なる手段を以て之れを避けざるべからず……是故に貧債を作らざるを以て第一の用心とせよ、貧乏とならざることを決心せよ、何たるを問はず其有す

るものはより少く費やせよ、貧乏は人間の幸福に取りて大敵なり、自由を破壞すること疑なく、道德の或るものを實行するに不能ならしめ、他のものを實行するに極めて困難ならしむ、節儉は啻に安靜の基礎なるのみならず、又善行の基礎なり、自己を助くる能はざるものは、他人を助くること能はず、使用し得る迄には十分有し居らざるべからず、

五十二

デユーク、オヴ、ウヰリングトン曰く、負債は人をして奴隸たらしむ、余は金錢を有せざる時の狀況を知らざるものにあらず、然れども決して負債を作ることなかりき、

五十三

ジョセフ、ブロザートン曰く、余の富有は、余が所有の盛大なるにあらずして、寧ろ余が要求の僅少なるにあり、

五十四

ゼレミー、テイロル曰く、遊惰を避けよ、而して一切時間の空處を充たすに嚴肅にして且つ有益なる事業を以てせよ、何んとなれば、精神にして事業なく身躰にして安逸なれば、肉欲が其虛に乘じて容易に入り來たればなり、安逸にして健康にして且つ遊惰なるものが、誘惑さることあらば、決して貞實なるものにあらず、之れに反して一切の事業中肉躰の勞動は最も有益なり、而して惡魔を驅逐するに最も有効なりとなす、

五十五

ジョシュア、レイノールヅ曰く、優秀は勞力の報酬としてより外は、決して人に付與せらるゝものにあらず、

五十六

バクストン曰く、一書を讀み了はらざる間は、決して他書を讀み始むることと勿れ、

五十七

又、曰く、咀嚼したるにあらざれば、決して書を讀み了はれりと思惟することと勿れ、

五十八

又曰く、何事に拘はらず、精神の全力を以て研究すべし、

五十九

サミユエル、スマイルス曰く、外部より來たる助力は、其結果、輭弱に陷ることあるも、内部より來たる助力は、強大にする所あり、

六十

又曰く、最も甚しき奴隷は暴君によりて支配さるゝ者の謂にあらず：……よしや其害惡は甚しくとも、……反りて自分自身の道德上の無識、我慾、及び不德の奴隷たる者の謂なり、

六十一

ハイルマン曰く、常に幾多の利益を得べきやを考へつゝあるものは、決して大事を成遂するものにあらず、

六十二

ニユートン曰く、若し余が公衆に多少の効用をなしゝことあらば、是れ

他なし、勤勉と辛抱強き思想とに本づくなり、

顔淵曰。舜何人也。予何人也。有爲者亦若是。是亦道二破此意一者。

六十三

ホウク曰く、余は如何なる處にあるも、神の恩惠により、力を盡して手に觸るゝ仕事をなす、若し仕事のあらざる時は、之れを作出だすべし、

六十四

ド、メイストル曰く、如何に期待すべきかを知るは、成功の大秘訣なり、

六十五

ヨング曰く、何人も他人の成したる事を成し得べし、

六十六

ジャクソン曰く、將來の儉約は、過去の浪費を償ひ得べし、然れども何人か果して明日の幾分間を取りて今日失ひたるものを償はんと欲すと云ひ得べきか、

六十七

ミケル、アンゼロ、曰く、余は信ず、極端なる熱望を以て富有ならんと欲するものは、貧者たるを免れざるべきを、

六十八

ラマンネイ或る一青年に謂つて曰く、汝は今自ら決斷をなさゞるべからざる年齢に達せり、幾もなく石を轉ずる力もなく、汝自身に堀りたる墳墓の内に嘆息するやも計られず、最も容易に吾人の習慣となるものは、意志なり、是故に鞏固に決定して意志することを學べよ、此の如くにして汝が浮浪の生命を確定せよ、而して最早枯葉の風の吹くに隨つてをちこちに運ばるゝが如くなること勿れ、

六十九

バクストン其子に書を送りて曰く、汝は今右若くば左に轉ずべき生命の時機に到達せり、汝は今主義、決定、及び精神の强力を示さゞるべからず、然らざれば汝は游惰に陷り、不定にして無能なる青年の習慣及び品性を得べし、而して若し汝が一たび墮落して此に至る時は、再び上達すること、の容易ならざるを見るべし、余は青年の其好む所の如くなり得べきことを保證す、余の場合に於ては此の如くなりき、余が幸福の大部分及び總べて余が生命に於ける繁榮は汝が年齡の頃になしたる變化より起れる結果なり、若し汝が嚴肅に決心して有力に且つ勤勉ならんことを企圖せば、終身其決定をなし之れに從つて身を處したることの智を喜ぶべき理由を有するならん、

七十

リヴィングストン曰く、今にして苦勞せる時の生活を回顧すれば、余が幼時の教育の實質を成せることに就いて感謝の情なきこと能はざるなり、若し出來得べくんば、再び之れと同じく卑賤なる有樣に於て生命を始め、之れと同じく困難なる練修を經べし、

七十一

ルッソー曰く、過失を爲すは、恥づべし、過失を改むるは、恥づべからず、

七十二

モンテイヌ曰く、欺くことは、甚しき不德なり、吾人の人類たるも、又吾人の相互に信ずるも、言語にのみ由るものなり、

七十三

是亦過則勿憚改
之意智者之言自然暗合矣

セント、オーガスチン曰く、時間は決して休まず、睡眠中と雖も、吾人は永遠に向つて進むものなり、

七十四

又曰く、胸中に慈善心を有するものは、必ず何等か惠與すべきものを有す、

七十五

ルナン曰く、若し生命を善用せば、汝之れに就いて滿足すべし、

七十六

エピクテートス曰く、汝が爲めの祝賀の日は汝が誘惑に打勝ちたる日ならざるべからず、

七十七

ソフオクレース曰く、善意は善意を生ず、

七十八

シセロ曰く、惡事の增大しつゝあるものは、其始めより惡なりき、

七十九

ギゾー曰く、其なし能ふ所は、當になさゞるべからず、

八十

リヴングストン臨終の時、兒子を呼び集め、之れに謂つて曰く、余は生存中我家族に關する一切の傳說を最も愼重に探究せしに、我祖先中未だ曾て不正の人あらざりしことを發見せり、是故に若し汝等の中、若くは汝等の子孫の中、不正なる事をなすものあらば、是れ我血液に循環せしが故にあらず、是れ汝等に屬するものにあらず、余は此敎訓を

汝等に付與す、正直なれよ、

八十一

バクストン曰く、人類間の大なる差異、即ち弱者と強者と、若くは大人と庸人との間に於ける大なる差異は、氣力―百折不撓の決心―一旦定めたる目的、而して死若くは勝利！此性質は世界に於て何事をもなさしむ、才能も、境遇も、機會も、是れなくしては、二足の獸を男兒となすものにあらざるなり、

八十二

古人曰く、職業の何たるを問はず、敏腕家とならんには、三件を要す、天性と研究と實行と、是れなり、

八十三

ロード、メルボルン曰く、汝は汝自身の路を開かざるべからず、汝が餓死するか否とは、汝自身の努力に山ることなり、

八十四

ワシントン、エルヴィング曰く、犬の吠ゆるものは、反りて獅子の眠むるものより有用なることあり、

第四　西洋の部（下）

一

ソロモン曰く、憎惡は爭を挑發し、愛は一切咎を掩ふ、

二

又曰く、言多ければ、罪なきこと能はず、其唇を緘むものは智慧あり、

（老子所謂多興）

三

又曰く、滅ぶるに先ちて人の心は亢ぶり、名譽を得るに先ちて苦痛を受けざるべからず、

四

イエス曰く、蠹くひ銹くさり盜人穿ちて竊む所の地に貨財を蓄ふると勿れ、

五

又曰く、人を議すること勿れ、恐くは汝等も議せられん、汝等が人を議するが如く、己れも議せらるべし、汝等が人を量るがごとく、己れも量らるべし、汝兄弟の目にある物屑を見て、己れが目にある梁木を知らざるは、何ぞや、己れの目に梁木のあるにいかで兄弟に向つて汝が目にある物屑を我れに取らせよといふを得んや、僞善者よ、先づ己れの目より梁木を取れ、然らば兄弟の目より物屑を取り得るやうに明かに見るべし、

六

セント、オーガスチン曰く、吾人は不德を脚下に踏み付くる毎に、神靈に導く梯子の一段を登る、

七

シャトーブリヤン曰く、過失をなしたる時は、塵埃中に平伏するも可なり、然れども其處に休止するは不可なり、

八

「イミタシオン・ド・ゼージュ、グリ」(書名)に云く、小なる過失を避けざるもの

は、次第に大なる過失の中に陷落す、

九

ヴグトル、ユーゴー曰く、國家の爲めに盡すは、本分の一半にして、人道に盡くすは、他の一半なり、

十

又曰く、國民の大さの其數によりて量るべからざることは、猶ほ人の大さの其長によりて量るべからざるが如し、唯一の量は智と德との分量なり、

十一

グラチアン曰く、智識と勇氣とは、偉大を造出だす、此二者は人をして不朽たらしむ、是れ不朽なるものなるが故なり、如何なる人も、智識を有する丈其れ丈の價値あり、而して智者はなし能はざる所なし、人にして智識なければ、世界は暗黑中にあるなり、識見と勢力即ち目と手となるべからず、勇氣なければ、智識も結果なき者なり、

十二

又曰く、長命の術は善良なる生命を送ることなり、愚昧と放埒とは速に生命より除かざるべからず、或るものは生命を持續するの智識を有せざるが爲めに之を失ふ、他のものは生命を持續するの意志を有せざるが爲めに之を失ふ、道德は自身の報酬なるが如く、不德は自身の形罰なり、不德に熱中する者は、二樣の意味に於て速に生命を終はる、道德に熱中するものは、決して死滅せず、精神の純潔は、身躰にも及ぶものにて、善良に送れる生命は單に內包的に長しといふのみならず、

又外延的にも亦然り、

十三

ハクスレー曰く、實業は手段にして目的にあらず、人類は唯、或物を要求し、之れを得んと欲して勞動するのみ、其或物の果して何たるかは、一は其生來の欲求、一は其習得の欲求に由るものなり、

十四

バロン・デュビアン曰く、吾人は詐僞、引淡、强奪によりて一時は成功すべし、然れども永遠に成功せんには、全く之れと反對の手段を取るより外なきなり、國家の産物及び品性の優等なるとを得るは、單に商人及び製造家の膽力、才智、及び活動にのみ由るにあらず、寧ろ適に其智畧、其經濟、殊に其廉直に由ると多しとなす、

十五

ソクラーテス曰く、世界を動かさんと欲するものをして先づ彼れ自身を動かさしめよ、

十六

コブデン曰く、世界の人は必ず分ちて二種の部類となす、何ぞや、貯蓄する者と、消糜する者と、即ち節儉なる者と、放縱なるものと、是れなり、一切家屋、水車、橋梁並に船舶の建築及び其他一切の大事業は人類を文明に導き、又之れに幸福を與ふ、然るに是等は貯蓄者即ち節儉者によりて成遂せらる、之に反して其資料を消糜せしものは、必ず其奴隸となれり、事の當に此の如くなるべきは、自然及び天命の法則なり、若し不用心、無思慮、且つ怠惰にして、能く上進し得べしと、或る部類の人に

對して之れを承認せば、余は虛言者に外ならざるなり、

十七

プライド曰く、如何なる人に取りても、又幾多の人に取りても、善くば其現在の地位を持續し、惡しくば其れ以上に上進するに唯一つの方法あるのみ、他なし、勤勉、儉約、節制及び正直の諸德を實行すると、是れなり、精神的狀態といはず、肉躰的狀態といはず、凡そ不愉快不滿足と感ずる地位より上進し來たらんには、是等の諸德を實行するより外別に良法あるにあらず、同輩中上進し、改善して止まざるものあるは、此れに由るを知るべきなり、

十八

フランシス、ホルネルの父、之れに訓戒を與へて曰く、余は汝が萬事愉快に生活するを欲すと雖も、經濟を奬勵するに於て尙ほ未だ十分ならざるを恐る、經濟は何人にも必要なる道德なり、假令ひ淺薄なる徒輩ありて之れを賤視すと雖も、是れ確に獨立を來たすものなり、獨立は高尙なる精神を有するものに取りては、偉大なる目的なりとなす、

十九

ラ、ロシフコル曰く、人の正すことを知らざる唯一の過失は、短處其物なり、

二十

又曰く、偉大なる性質を有するのみにては、未だ十分ならず、又其れに就いて經濟をなすを要す、

廿一

又曰く、詔訣は僞造貨幣の如く、唯、吾人の誇衒によりてのみ通用す、

廿二

ヘイドン曰く、如何なる娛樂も、借金なしに得られざる時は、決して之れを買ふことなれ、決して借金することなれ、借金は人をして墮落せしむ、但し決して貸す勿れとは言はず、然れども人に貸すが爲めに自ら借金を拂ふ能はざるの恐れある時は決して貸すこと勿れ、假令ひ如何なる場合にありても借金することなれ、

廿三

スコット曰く、各個人の教育中最も善良なる部分は、其自己に對する教育なり、

廿四

デヴーデ、ロス曰く、余生涯に他日天才として認容せらるべき幾多の人を識るを得たり、彼等は何れも勉强家なり、勤苦せる熱心家なり、天才は其著作によりて知らる、著作なきの天才は盲目的信仰のみ、沈默せる識語のみ、然れども成功せる著作は、時間と勞力との成果なり、志向若くは思欲によりて成遂げらるべき者にあらず、如何なる大作も巨大なる準備的練習の成果なり、勞力に隨つて事は容易となる、如何なる事も容易ならざるが如し、初め困難を覺えざりし歩行と雖も、亦然り、雄辯家が其眼、石火の如く閃き、其脣、高尙なる思想を以て溢れ、其不意打により驚かし、其聰慧及び眞理により高尙にするが如きは、辛抱强き復習により且つ幾多の苦々しき失望の後に其秘訣を得たるものなり、

廿五　ジョンソン曰く、研究に就いて短氣なるは、現代の精神病なり、

廿六　ロバルトソン曰く、繁雑なる講讀は精神を弱くすること、喫烟に異ならず、而して睡臥することに就いて口實となるものなり、是れ蓋し一切遊惰中の最も遊惰なることにして、如何なる事よりも、人をして、無氣力ならしむること多しとなす、

廿七　イエス曰く、總べて善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり、善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざるなり、凡そ善果を結ばざる樹は、斫られて火に投入せらる、是故に其果に由りて之れを知るべし、

廿八　又曰く、收穫は多きも勞働者は少なし、

廿九　又曰く、善人は胸中の善庫より善なるものを出だし、惡人は胸中の惡庫より惡なるものを出だす、蓋し是れ胸中に充つるが故に口頭に溢るゝなり、

三十　又曰く、夫れ掩はれて顯はれざるものはなく、隱れて知られざるものはなし、是故に汝等が幽暗に於て言ひしことは、人之れを光明に於て聽くべく、汝等が室內に於て耳語せしことは、人之れを屋上に於て說く

中庸曰、莫レ見ニ乎隱一、莫レ顯ニ乎微一、故君子愼ニ其獨一也、亦謂ニ之ノ誠一也、

是唯比喩耳、蓋謂ニ教レ道則必有ニ從ヒ之者一也、

也。

老子曰。天之道。其猶弓乎。高者抑之。下者舉之。其意蘇耶。與之相符焉。全言一言。

べし、

冊一

又曰く、凡そ自ら高くするものは、卑くせられ、自ら卑くするものは、高くせらるべし、

冊二

スピノザ曰く、憎惡は憎惡を以て之れに報ゆるに由りて倍加す、之れに反して憎惡は愛情に由りて剗除せらる、憎惡が全く愛情に出りて打勝たれたる以上は愛情に轉化し、愛情は乃ち憎惡の起りし前に比して一層多大なるを得るなり、

冊三

ソル、ホムフリー、デヴィー曰く、余の余たるは、余自ら之れを成せり、余の斯く言ふもの、誇衒にあらず、單純なる心胸のみ、

冊四

エメルソン曰く、汝は自ら其害を被らずして、他に害を加ふる能はず、

冊五

フランクリン曰く、怠惰は猶ほ錆の如し、使用せざる鍵は錆によりて腐蝕し、日常使用する鍵は光輝を放つ、

冊六

又曰く、今日なし得ることは、決して明日に延ばすこと勿れ、

冊七

チショルム女史曰く、何事にせよ、之れを成遂げんと欲せば、乃ち勤勞に就き、之れを成すを要す、單に其事を言ふは無益なり、何事も言ふを要

是亦欲下訥二於言一而敏中於行上之意。

せず、

卅八

デスレーリ曰く、仰視せざる青年は俯瞰すべし、上昇せざる精神は恐くば匍匐するの運命を免れざるを、

卅九

グランヴィル、シャープの家族の格言に云く、其外面に顯はさんと欲する所を必ず眞實にせんことを務めよ、

四十

リンチ曰く、一切習慣中の最も聰慧なるものは、善良なる習慣を造ることを緬想する習慣なり、

四十一

モンターグ女史曰く、禮貌は何等の費用をも要せず、然れども以て何物をも買ひ得るなり、

四十二

ニーチェ曰く、十分精神ある書籍は反對者にも亦之れを付與す、

四十三

又曰く、其著書が口を開くに當りては、著者は宜しく口を箝むべし、

四十四

イエス曰く、今や斧を以て樹根に加ふ、故に凡そ善果を結ばざる樹は斫られ、火に投入せらるべし、

四十五

又曰く、身の光は目なり、若し汝の目にして純ならば、全身も亦明かなる